

経験とファンタジーのなかの和歌の浦

—田山花袋「月夜の和歌の浦」を読む—

島津 俊之*

Toshiyuki SHIMAZU

Wakanoura between experience and fantasy:

A multi-contextual reading of Tayama Katai's "Getsuya no Wakanoura"

I はじめに

近世の和歌山城址から直線距離で 4.5km ほど南下した辺りに広がる海辺の一角は、近世以降「和歌山」とも表記されるようになった城下町の、「和歌」なる雅びな名の「生みの親」とされ、「和歌山に住む人にとって何よりの宝物である。同時にそれは日本人全体にとっても大切な宝物である」(犬養 1993: 1)とまで誉め讃えられる場所である。「日本人全体」という物言いの背後に、いかなる歴史意識あるいは暗黙前提が含まれるのかの詮索はさておき、その場所が 2010 (平成 22) 年 5 月 21 日付で、文化審議会より文部科学大臣に「名勝」として新指定すべく答申された二か所の一つであったことは事実である。文化庁の報道発表によれば、他の一か所は「近世から近代にかけて南紀白浜地方を代表する海浜の景勝地として全国に知られ」た「円月島 (高嶋)」であるが、見方によっては都市化や公共事業の帰結としての建造環境ばかりが目につくその場所の誉め讃えられ方は尋常でない。何しろそこは、「都に住む多くの貴族にとって憧れの海の景勝地」であり、「古代から近代にかけて長い時間の経過の下に形づくられてきた日本の代表的な海浜の風致景観」として持ち上げられているのだ。白状すれば、1962 (昭和 37) 年生まれわたしも、訪れたこともないその場所の、雅びな名に憧憬にも似た気持ちをいつしか抱かされてきた旅好きな日本人のひとりであった。同じく旅好きな近代日本のとある文人が、すでに 1923 (大正 12) 年の時点で、「こんなにつまらなく、平凡に、海でもなければ湖水でもないといふやうなものになつて了つた」(田山 1923: 300)²⁾と、その場所を扱き下ろしていたことも知らずに。そして、場所の「風致」を危うくしかねない、都市化や公共事業の発信源でもある城下町起源の県庁所在地

に思いがけずも 1996 (平成 8) 年に赴任し、「和歌の浦」と呼ばれるその場所のリアルな有様を自己経験的現実として目の当たりにするまでは。

さて、古の天皇の行幸地、そして『万葉集』以来の歌枕の地でもあってみれば、前述のポジティブな場所表象の系譜が曲折はしても途切れることなく、明治近代の文人たちに引き継がれたとしても不思議ではない。半田 (1993: 238) は、「近代に入ってもなお、和歌の浦は、文人たちにとって心を寄せるに足る文化的な空間としてあったようだ」として、幾人かの著名人の訪問に触れている。なかでも、「坊っちゃん」で有名な文人が 1911 (明治 44) 年 8 月にそこを訪れ、同所に前年開業したばかりのモダンかつ風致を害する観光施設 (V 章参照) を体験したことは知られている (半田 1987: xi-xiv, 201-205, 2005: 166-169; 高嶋 1993: 127; 藤本 1993: 36; 梶川 2004-10; 和歌山県教育委員会ふるさと教育副読本編集委員会 2009: 170)。しかし夏目金之助 (1867-1916) と同時代を生き、彼が奠供山に設置された望海楼のエレベータに乗る 4 年前に「蒲団」なる自己暴露的作品を発表して物議を醸した文人が、1898 (明治 31) 年 4 月に同所を訪れて一文を物したことは、地元研究者の間では知られていない。旅好きな田山録弥が、同年に紀伊半島を時計回りに旅したことは、彼の「案内記・紀行文の評価が俟たれている」(青田 2002: 141) と説く『紀伊半島近代文学事典』で触れられるが、「月夜の和歌の浦」なる紀行文に光は当たらない。1899 (明治 32) 年刊行の『南船北馬』の一章として世に頭われ (1899c: 167-185)、この「作者に取つてことに意義の深いものであつた」(1922: 序) という紀行文集が 1922 (大正 11) 年刊行の『花袋紀行集 第一輯』にそのまま収録された他は (1922: 291-604)、その 2 年前に出た『山水紀行筆行脚』に断片が採録されるのみ

* 和歌山大学教育学部地理学教室

である（文献会編輯所 1920: 7-8）。戦前の二度に亘る『花袋全集』や近年の『定本花袋全集』にも収録されず、花袋研究者でなければ、埋もれ去った文章だったと言いつても罰は当たらない³⁾。

むろん花袋研究者の間では、彼の紀伊半島旅行や件の文章それ自体は知られた存在である（小林 1976: 605-611, 683, 1984: 27; 宮内 1989: 100, 1995b: 229, 2002: 88-89; 丸山 1990: 89-90; 宇田川ほか 1995: 85; 杉井 2004: 39-40）。しかし「月夜の和歌の浦」を、それが生み出されるもととなった紀伊半島旅行との絡みで論じた先行研究は無い。田山録弥の「案内記・紀行文の評価が俟たれている」（青田 2002: 141）という前述の認識は、現在でもそのまま当てはまる。

ところで金坂（2010: 96, 110）は、英国人女性の旅行記に関する自らの経験的研究に基づいて、次のような言葉を紡ぎ出した。

旅行記を読むとは、その基になった旅を読み、旅する人を読み、旅した場所・地域を読み、旅した時代を読むことである

この明晰な言葉にヒントを得て、わたしは「旅行記」を文章・絵画・写真・映像・彫塑といった物質性をもつ表象一般にまで拡大し、それらを広義の「テキスト」とみなして⁴⁾、テキスト読解の方法規準を次のように考えたい。すなわちテキストを読むとは、①テキストそれ自体を読み、②テキストの生産者を読み、③テキスト生産の直接的基盤となった行為を読み、④テキスト生産の時空間的背景を読み、⑤テキストが直接的に表象する対象を読み、⑥テキストと他のテキストとの関係性を読むことである、と。②～⑥の規準は、有体にいえば「コンテキストを読む」ということに他ならないが、その中身を順不同で今少し細かく腑分けしてみたというわけだ⁵⁾。

本稿の目的は、如上の方法規準を適用しつつ、「田山花袋」の名で書かれた「月夜の和歌の浦」を読むことにあるのであって、作家の喚起的な場所描写がいか「場所感覚の本質（essences of sense of place）」（Mallory and Simpson-Housley 1987: xi）を抉ったかを論じるのではないし、「地域に即した文学の本質を説明」（半田 1993: 231）するものでもない。ましてや、かつての人文主義地理学の如く（Pocock 1981; Olwig 1981）、場所の文学的描写の実証主義的記載に対する優位（有意）性をア priori に強調するものでもない。以下Ⅱ章では、田山録弥＝花袋を文学作家とのみ理解する狭い見方から脱

し、彼を「民間地理学者」としても位置付けうることの正当性を、彼自身の文章を根拠としつつ主張する。これは前記②の方法規準に該当する。Ⅲ章では、田山録弥の紀伊半島旅行がなされた時空間的背景を探り、和歌の浦に辿り着くまでの彼の旅程について触れる。ここでは③と④の方法規準が動員される。Ⅳ章では「月夜の和歌の浦」の内容に触れ、どこまでが田山の地理的経験に基づき、どこからがファンタジー⁶⁾であるのか、かかる紀行文が生み出された理由は何処にあるのか、そこに彼の民間地理学者としての資質がいかに関与していたのかを、できうる限り実証的に明らかにする。ここでは、①～⑤の方法規準が総動員される。そしてⅤ章では、⑥の方法規準の命ずる通り、田山の和歌の浦に関するその後のテキスト群に触れ、「月夜の和歌の浦」との関係性について論じる。そこでは諸テキスト間の断絶と連関が明らかにされるとともに、間テキスト性を参照枠としつつ、「月夜の和歌の浦」のもう一つの意味（意義）が明らかにされることになろう。

Ⅱ 民間地理学者としての田山録弥

旅好きの田山録弥は小説の他に、膨大な案内記や紀行文の類を遺した（宮内 1989, 1995a,b）。その頂点をなすようにみえるのは、1910（明治43）年から1914（大正3）年にかけて、勤務先でもあった博文館より刊行された『新撰名勝地誌』（全十巻）であろう。「巻之三 東海道東部」の巻末広告に、「最も特色とすべきは編者の足跡殆んど海内に沿く残山剩水と雖も訪はざるなく探らざるなく従つて其記述と排列と頗る精確を極めたる事是也」（1910b: 広告3）とあり、五畿七道をカバーする全10冊の案内記を、田山花袋という流行作家が全て単独で編集・執筆した体で刊行されている。事実とすれば尋常でなく、果して田山に師事していた白石実三（1886-1937）は、1934（昭和9）年に次の如く語ったのであった（白石 1934: 6）。

二十三四歳の頃、私は、博文館の『新撰日本名勝地誌』といふ十二巻ものを、十巻書きましたが、地理歴史といふものの面白みを知つたのは、その時でした。当時は、吉田東伍博士も在世中のことでしたが、私はあの尨大な『地名辞書』を通読すること二回におよびました。

この一件⁷⁾は田山録弥の書誌(宮内 1989, 1995b)では触れられていないが、ここで俎上に載せたいのは『新撰名勝地誌』の代作疑惑それ自体ではない。小林(1980: 649)は、田山録弥の「町」と題する案内記風の文章(1911b)を「面白味のない、文学性の欠けたもの」と評し、「もっと文学性のないのは、勿論『新撰名勝地誌』である」と断じる。田山録弥を「花袋」という筆名の文学作家としてのみ理解するならば、かかる評価がなされても仕方がないが、森 林太郎(1862-1922)の実証的な歴史叙述群に、「史伝文学」という一元化的レッテルを反省性(reflexivity)なきまま貼り付けることの限界をわたしたちは認識すべきであると同様に、田山録弥の文章を「文学性」のレンズを通してのみ理解することは、社会文化事象の異種混濁性(heterogeneity/hybridity)が視野に入りにくいという点で限界をもつ⁸⁾。「流麗な記述」をなしうる「新進の紀行文家」として田山を位置付ける岡田(2002: 21)も、「紀行文家」という別のレンズを用いるかのようにみえて、「流麗な記述」という物言いに同じレンズの装着が仄見える。しかし田山録弥自身は、己の異種混濁性に自覚的であった。先述の白石実三は、次のように回想する(白石 1934: 7)。

花袋翁は、しばしば意外なことを言つた。『小説で一番になるのは、むづかしいね』と、笑つて戯れて『だが、紀行文では一番だらう。競争者がないからな。評論だつて、僕が一番かも知れない』

本章でのわたしの具体的主張は、反省性なき単眼的レンズの代わりに反省性を伴った複眼的レンズを用いつつ、田山録弥のかかる自己認識を超えて、彼を民間地理学者としても理解すべきだということである。

ここで「民間地理学者」、あるいは「民間地理学」という言葉について説明しておきたい。そもそも、地域的諸事象の記載・説明・解釈・伝達行為としての「地理学(geography)」は、アカデミックなディシプリンとしての専門分野を意味するに留まらず、様々な人々の生きられた経験(lived experience)からなる諸現実をも意味している(Buttimer 1998: 91)。そこにはむしろ、アカデミアや官庁に属さない民間の人々の多様な思想や実践も含まれるのであって、その多様性を含意すべく、英語圏ではpopular geographiesという表記が一般化している(Crang 1996)。「民間地理学」とは、その和訳

としてわたしが用いている言葉である(島津 2009: 4-9)。英語圏における地理学史研究では、こうした多様性を孕む存在としての民間地理学や、それらのアカデミック地理学との関係性に持続的な関心が向けられている(Clout 2005, 2008a,b; Johnston 2009)。本稿で「民間地理学者」と称するのは、かかる民間地理学の担い手たちであって⁹⁾、そこには旅行家や編集者、地図制作者や郷土史家、はたまた写真家や画家といった多種多様な人々が含まれる。そして、これらの民間地理学者たちと官庁地理学やアカデミック地理学との距離や関係性も多種多様であって、かかる関係性のなかでの個々の民間地理学者の位置付けが必要になってくる。だから、田山録弥は博文館の「館員」¹⁰⁾として『大日本地誌』や『新撰名勝地誌』を執筆したから民間地理学者なのだ、というだけでは駄目なのだ。ちなみに、この方面での先駆的業績は『文学のなかの地理空間』(杉浦 1992: 138-156)であって、鹿野忠雄(I章参照)が卒業した東京帝国大学理学部地理学科の初代教授を務めた山崎直方(1870-1929)と田山録弥との、博文館における『大日本地誌』の編集を通じた関わりや、田山の地理学的素養の深さが傍証的に呈示されている。また茅原(2006)は、杉浦(1992: 152)も触れた田山の「小説地理」の構想について考察している。しかし以下では、田山花袋の小説における地理空間の描かれ方を探るアプローチとは異なり、田山録弥の文章を、彼の民間地理学者としての立ち位置を論じるための証拠として用いることにしよう。

まず指摘すべきは、田山録弥が、生成途上にあった同時代日本のアカデミック地理学(の萌芽)がもたらしていた知識を、それなりに吸収していたというテクニカルな現実である。杉浦(1992: 150)も言及したが、田山自身が自伝『東京の三十年』(1917c: 394)のなかで次のように語っている。

『大日本地誌』の編輯の手伝ひを私は明治三十六年から始めた。山崎直方君、佐藤伝蔵君が主任で、私と他に若い文学士一名、理学士一名が手伝つた。私は山崎君、佐藤君から地理に対する科学的研究の方法を教へられたことを感謝せずには居られない。

田山録弥が全十巻の『大日本地誌』の中身を執筆してもいた、という物言いは(小林 1967; 岡田 2008)、白石実三のような当事者の声の裏付けを欠

くとファンタジーの域に留まる惧れもあるが¹¹⁾、ここで問題としたいのは、むしろ田山がいかなる種類のアカデミックな知識を吸収していったのかということである。まず、1909(明治42)年の『文章世界』に発表された文章(1909a)のなかから、再び田山自身の声を拾ってみよう¹²⁾。

踏査——私はこの踏査といふことを地理学から学んだ。日記よりも手紙、手紙よりも踏査の肝要なのは私は感じた。歴史地理といふ学問は面白い学問である。私は小説地理といふことを『田舎教師』に由つて考へた。私が小説製作上実在を尊ぶのは、決して消極的ではない、積極的である。史家が古城址をさぐり、地理学者が山嶽を踏査するのと同じ位に思つてゐる(1909a: 103-104)

茅原(2006: 4)は、「小説地理について花袋自身は明確な意味を述べていない」とする。しかし田山録弥は小説において、「作者の主観から来る色彩は成たけ没し去」ることをめざす「描写」を重んじた(1909a: 104-105)。そこでは、書き手の気配を消した客観的かつ俯瞰的な状態描写が求められる¹³⁾。むろん書き手が物理的に消えるはずもなく、表象の限界は「主観を没せる主観」(1909a: 105)として明視される。つまり、「既に一度作者の眼から頭に入つて行つて……作者の小さいある見方に汚されてゐない」状態の「再現」が重要となる(1925a: 33)。そこに、「研究の精神」に基づく「踏査」に由来する地理的データを潜り込ませ、「ローカル、カラー」や「新しい生々とした感じ」を得る(1925a: 44-46)というのが、「小説地理」の中身であろう。「心理を外物で顕はす」(1909a: 103)とは巧い表現である。つまり田山は、客観性ある「外物」たる地理的データの収集技法としての「踏査」、つまりはフィールドワークの技法を、地理学から学んだというわけだ。それは好いとして、妙なのは「歴史地理といふ学問は面白い」の一節である。杉浦(1992: 152)や茅原(2006: 2)も引用するが、この一節は明らかに前後の文脈から浮いている。ここにいう「歴史地理」とは何であり、「踏査」といかなる関係にあると田山録弥は考えていたのか、この引用文だけでは判断し難い。答えは、予め1907(明治40)年の『少年世界』に発表された、「旅行と地理」と題する文章のなかにある(1907: 56)。

歴史と地理とを併せて研究するといふことは非常

に面白いことで、これは西洋でも地理学の発達に伴つて起つた最近の研究法ださうです。人事は改まるが、地形は変らぬ。ですから地理に由つて其昔を思ふと実に趣味が多く、且つ新しい事実を発見する。

ここで田山が「西洋でも地理学の発達に伴つて起つた最近の研究法」として言及する内容は、帝国大学文科大学外国人教師のルートヴィヒ・リース(1861-1928)に率いられた設立当初の史学会や、その流れを汲む日本歴史地理研究会(後の日本歴史地理学会)に漲っていた考え方、すなわち、歴史の舞台としての地理の意義を重視しつつ歴史研究を行う、という考え方に極めて近い(島津2009: 61-63)。小川琢治(1870-1941)の後を継いで京都帝国大学文学部の地理学担当教授となった石橋五郎(1876-1946)が、この流派の出身であつたことは想起されてよい¹⁴⁾。田山のいう「踏査」は、地域の単なる現況観察に留まらず、観察を「其昔」すなわち歴史へと結び付ける知的営為を含むものであつたといえよう。このことは、「月夜の和歌の浦」を読み解く上で一つのヒントを提供しうる(V章参照)。

田山録弥は、かかる「踏査」の対象としての「地理」が変転常ないものであること、ために踏査の結果として表象される「地理」が直ちに古びてしまうことに自覚的であつた。1906(明治39)年刊行の『日本新漫遊案内』で、彼は「地理は其描きたる刹那に於てのは精確なりといふ」(ルビ引用者)と述べ、ここでも表象の限界¹⁵⁾に言及している(1906: 凡例)。『新撰名勝地誌 巻之一 畿内』の「凡例」では、「地理」の中身がさらに分節化され、「地誌は一日も精確なる能はずといふ。人文を記せる地理に於て殊に然りと為す」(1910a)として、人文地理的表象の儂さに特別の注意が向けられる¹⁶⁾。1923(大正12)年刊行の『京阪一日の行楽』にも、「地理はその書いた時のみが精確だと言はれてゐる」とあり(1923: 凡例2)、同じ認識が引き継がれている(V章参照)。アカデミックな地誌を描くことを希う現代のわたしたちも、田山録弥と同じ認識を共有するものである。

田山録弥は、教壇の高みに立って地理学を講じたことは無い。しかし彼は、あたかも地理学者であるかのような物言いをあちこちで公にしていた。前述の「旅行と地理」のなかで、田山は次のように書く。

旅行は面白いことです。第一、人間に最も大事な

地理を知ります。地の理は何につけても極く大切で、ナポレオンも露西亜の地理に明かでありましたら、あゝむぎとモスコオの大敗を取らなかつたでせう。……何ういふ港があるかとか、何ういふ結果でこの市街が繁華になつたとか、そういふことを詳しく知つて居なければいかん。これをよく知つて、成程これは日本が東洋に覇権を握る所以だと、心から眺つたのでなければ駄目であると思ひます (1907: 52-53)

日露戦争後の帝国主義的な空気が伝わってくるような文章だが、「地の理」すなわち地理を知ることが敵味方を問わず国家を知ることだ、と言わんばかりの物言いは、近代の国家主義や帝国主義の時代に地理学に期待された一般的役割を、田山録弥が彼なりの言葉で認識していたことの顕われである。

田山録弥の民間地理学者としての側面は、1917 (大正6)年の『青年文壇』に連載された「新小説作法」という一連の文章のなかにも、思いがけないかたちで姿を顕わしている。多読と生活経験の豊富さが、それらの比較に基づく深い人間洞察を可能にし、それが小説の糧となるということを青年に向けて説くがために、田山は何故か次のように書く¹⁷⁾。

例へて見れば、此処に、彼方此方の地理を知つてゐないものと知つてゐるものがある。そしてこの二人が同じ武蔵野なら武蔵野、近畿地方なら近畿地方を研究したとする。知らない方のものには、武蔵野だけはわかるが、研究することだけは出来るが、それを他の地方に比べて見て批評することが出来ない。これに反して、知つてゐる方は、それを色々な地方に比べて考へて見ることが出来る。従つて背景が広く、理解が正しくなる。……読書も実生活に於ける経験もこれと同じである (1917a: 198)

あたかも地理学者が、自らの地域比較の経験を知識比較や生活経験比較の実践へと敷衍しつつ、比較という作業の一般的有効性を説いているかのような文章である。民間地理学者としての一面は、どうやら田山録弥の人格のなかに確固たる地位を占めていたようだ。

しかしこれだけではない。田山は、地理学の巡検指導者としての眼も併せもっていた。現代のわたしたちが、巡検指導に際して学生たちに口走るのと同じようなことを、彼はすでに1911 (明治44)年の『文章世界』に発表した「新しき紀行文」¹⁸⁾で説いている。

旅行をする人は、直覚が鋭敏であると共に、旅をする地方其ものゝ知識に富んでゐなければならない。……其地方の沿革古蹟は勿論、現今に於ける其地方の生活状態、産業、地形、さうしたものを詳しく研究して行けば行くだけの利益は必ずある。……直覚から来る印象の尊ぶべきは勿論だが、理解から来る印象は、其印象の輪郭を益々鮮かならしむるものである (無署名 1911a: 25)

田山録弥にとって、かかる「理解」をもたらず知識の一源泉として旅行者が携行すべきものの一つが、他ならぬ地図であった。現代の地理学巡検でも、事情は全く同じである。とくに田山は、陸地測量部発行の「輯製 20 万分 1 図」と称される中縮尺編集図の利用を、青少年や一般の旅行者に向けて再三説いていた¹⁹⁾。1906 (明治39)年刊行の『日本新漫遊案内』で、田山は次のように奨める (1906: 凡例 1-2)。

此の漫遊案内を携ふる人は、成るべくこれと共に陸地測量部二十一萬地圖、もしくは地質調査所の二十萬地形図を併せ見るべし。鉄道より各名勝地に達する交通は成るべく明瞭ならんことをつとめれば、以上の地図に併て照さば、一目瞭然たるを得ん (ルビ引用者)

翌1907 (明治40)年の「旅行と地理」では、青少年に向けて田山が説く。

それから旅行に就いて、諸君に御勧めしたいのは、地図を見る眼の修養です。中学校を出た人々もまだ充分陸地測量部の地図地質局の地図を見る力を有つて居られぬやうです。二十萬分一図を見ても、何処が低く、何処が高く、何処が谷で、何処が山の頂きかといふことは更に御分りにならんやうだ……良好なる案内記と地図、これは旅には離されぬものです (1907: 57)

『新撰名勝地誌』では、1910 (明治43)年刊行の「卷之三 東海道東部」(1910b)において、「凡例」に以下の記述が初めて登場する。

交通路によりて名勝故蹟を排列し、遊覽者をして一見其位置を知らしむるは本書の特色にして編者の最も力を用ゐたる所なり。従つて地形地勢に関する記述も少なからず。読者は陸地測量部の二十萬分一の地図を併せ見るを便とすべし。

以後、1914（大正3）年刊行の「巻之十 北海道之部」（1914b）に至るまで、田山録弥は『新撰名勝地誌』の読者に輯製20万分1図の携行を奨め続けることとなる。強調すべきは、田山が博文館で『大日本地誌』の編集に携わって初めて輯製20万分1図に目覚めた訳ではない、ということだ。じつは田山は、1899（明治32）年9月の博文館入社の前年に敢行した、まさに「月夜の和歌の浦」がその行程の一部をなした紀伊半島旅行に、すでに「輯製二十万分一の地図」（1899c: 154）を携えていたのである（Ⅲ章参照）。杉浦（1992: 152）は、先に引用した『東京の三十年』における田山自身の語り（1917c: 394）に基づいて、「花袋は、『大日本地誌』編集の過程で地理学への興味を覚え」たと書く。しかし田山録弥は、「地理学」という言葉に自覚的であったかどうかは別にして、博文館入社以前より、すでに民間地理学者の卵のような振舞いを好んでしたというべきである。さらにいうならば、前述の歴史地理への志向性も、紀伊半島旅行の時点ですでに彼の心に芽生えていたのであった（Ⅲ章参照）。

田山録弥は、案内記と紀行文（旅行記）の異同に関して、「地理」という言葉を用いつつ、極めて大胆かつ興味深い論を展開しかつ転回させてもいた。1906（明治39）年の『日本新漫遊案内』では、「自序」に次のような文言がある（1906）。

旅行記は宜しく絵画の如くなるべく、案内記は宜しく地図の如くなるべし……旅行記は文学なり、案内記は地理なり、旅行記は空想にてもありぬべし、案内記は断して事実ならざるべからず。

「案内記は地理なり」という断言は、これまで民間地理学者としての田山録弥の物言いをみてきたわたしたちにとっては、直ちに古びてしまう「地理」であったにせよ、別に驚くことではない。『新撰名勝地誌 巻之一 畿内』の「凡例」には次のように書かれている（1910a）。

地誌と称すと雖も、実は旅行案内記なり。……名勝に詳しくして、産業、沿革、地形等に粗なる、また止むを得ず。然りと雖も、著者は成るべく其方面に於ても簡明なる記述を為さんことを試みたり。

弟子に代作させたかもしれないが、田山録弥にとっては、産業や地形にも筆が及ぶ「旅行案内記」としての『新撰名勝地誌』は、紛れもなく「地図の如く」

に書かれた「地理」なのであった。

これに対して旅行記はどうか。「絵画の如く」というのは、案内記のように地面の上の諸要素を「地図の如く」に細々と説明するのではなく、場所の全体的な印象特性や雰囲気如きものを描き出すのが旅行記なのだ、という物言いである。これは後述のように、じつはアカデミック地理学の言説にも通じる認識であって、極めて興味深いものといえるし、現実には田山の物した案内記のなかに、彼のいう旅行記風の文章がエピソード的に挿入されることも度々であった（Ⅲ章・Ⅳ章・Ⅴ章参照）。これに対して、驚くべきは「旅行記は文学なり」という断言であり、「空想にてもありぬべし」という田山録弥の開き直ったかのような物言いである。旅行記はファンタジーでも良い、と言い切っているのだ。後世の研究者が「文学性」のレンズを単眼的に用いることを、田山録弥自らが予め許していたかのような、旅行記という言葉遣いに背馳するかのような言い草である。しかしかかる物言いが、田山の紀行文や「月夜の和歌の浦」を読み解く鍵の一つとなることは確かである（Ⅲ章・Ⅳ章・Ⅴ章参照）。むしろ、しつこいようだが、唯一の鍵ではない。

ところが田山録弥の紀行文論（旅行記論）それ自体は、彼が物した紀行文の一部とは裏腹に、やがて大きな転回を遂げることになる。「蒲団」や『田舎教師』を発表して「自然主義の主唱者」（山の人 1911: 30）と目されるようになった1911（明治44）年に、田山は無署名で紀行文に関する短い文章を二つ『文章世界』に発表している（無署名 1911a,b）。両者はいずれも同年発行の『花袋文話』（1911c）に収録され、ために田山の文章であることがわかるのだが、先に触れた「新しき紀行文」と題する最初の文章のなかで、彼は次のように書く。

西洋の旅行記は、学者の地理的旅行記と、文学者の文学的旅行記と二種類ある。彼方で旅行記と言へば、重に学者の地理旅行記か、探検者の探検旅行記かを指してゐる。……其の学者の旅行記は、文章も旨く、学術的知識にも富んでゐるか、しかしわれ等の要求するやうな旅行記ではない。直覚的印象と理解的印象との好い塩梅に調和されて、実際のロオカルがその句と句との間に出て、そして批評と感興とに富んだやうなもの……つまり新しい紀行文は地図の精確と絵画の妙味とを持つたものでなくてはならない（無署名 1911a: 27）

もはや「旅行記は空想にてもありぬべし」といった

驚くべき物言いは、ここにはみられない。彼のいう「新しい紀行文」とは、「絵画の妙味」に加えて、5年前には「案内記」の要件とされた「地図の精確」をも併せもつべきとされるのである。ここで先に触れた、田山録弥の旅行論（巡検論）とでもいうべきものを思い出そう。同じ「新しき紀行文」で、旅行者は鋭敏な直覚と豊富な知識を持たねばならないなどと、地理学の巡検指導者のようなことを田山は説いていたが（無署名 1911a: 25）、つまりは直覚が「絵画の妙味」を生み出し、知識に基づく理解が「地図の精確」を生み出すというわけだ。一方で田山は、「地図の精確」を伴う「理解的印象」に特化した「学者の地理的旅行記」は、「われ等の要求するやうな旅行記ではない」と突き放すのである。

「現代の紀行文」と題する二番目の文章では、次のような物言いが目に留まる。

天然といふものを人事を離して単独に研究するの
も意味の多いことだ。地理学者の乾燥な研究に任
かせて置くことは出来ないやうなところがある。
しかし天然と人事と交錯した処には、一層深い細
い色彩と空気とがある。……天然と人事との交
錯を詳しく観察した旅行記、さうしたものが欲し
い（無署名 1911b: 81）

ここで田山のいう「地理学者」とは、専ら自然地理学者をさしているが、ここでも田山は、彼が「地理学者」の所業と認識するところのものから距離を置いている。地理学者とは異なって、現代の紀行文は「天然と人事との交錯」から生じる「深い細い色彩と空気」をキャッチすべきであると。ちなみに、ここでの「空気」とは、V章で説明する如く、場所の間主観的な「直覚的印象」（無署名 1911a: 27）をさすものである。

では、田山録弥のいう新しい現代の紀行文とは、現実にはいかなるものであったのか。その一例は、同じ年に田山が『文章世界』発表した「春雨にぬれた紀州の旅」の一節にみることができよう。これは、他ならぬ1898（明治31）年春の紀伊半島旅行を描いたものである。

紀州は暖かい国であつた。行つて見ると、其処には菜の花が咲いて居た。蛙が鳴き立てゝいた。海岸の家畑には、夏蜜柑がその黄ろい大きな実を艶の好い緑葉の中に見せて居た。風の寒い伊勢志摩から比べると、かうも違ふかと思はれるほど気候が暖かであつた。此国の沖に近く、暖流が西から東へと流れて居た（1911a: 14-15）

この一節の前半は目に見える風景叙述であつて、いわば「直覚的印象」、換言すれば「絵画の妙味」が顕われ出でたものといふことができる。そこには、「蛙」や「海岸」といった「天然」と、「菜の花」や「夏蜜柑」といった「人事」の「交錯」から生じる、「色彩と空気」が一応は描かれているといふ。後半は、前半に叙述された「色彩と空気」の規定要因としての気候条件の説明であつて、むしろ「理解的印象」に相当する部分である。見逃せないのは「暖流」であつて、紀伊半島南部に「風の寒い伊勢志摩」とは異なった温暖さをもたらす黒潮の位置や流れの方向についての「地図の精確」が、短い一節に鮮やかに挿入されているのだ。田山は、かかる「直覚的印象と理解的印象との好い塩梅に調和されて、実際のロオカルがその句と句との間に出」たやうな紀行文は、「学者の地理的旅行記」とは質を異にすると考えていた。地理学者の旅行記は、「理解的印象」や「地図の精確」に富む半面、「直覚的印象」や「絵画の妙味」を欠くと田山は考えていたのである。

ところが田山録弥は、近代ヨーロッパの地理学者の一部や、彼らの言説を学習した近代日本のアカデミック地理学の創始者や後継者が、自らのいう「直覚的印象」や「絵画の妙味」を重視しようとしていたことまでは知らなかった。アカデミック地理学の創設者の一人であり、山崎直方の帝国大学理科大学地質学科の一年後輩であつた小川琢治は、京都帝国大学において「日本群島を地誌として講述するに際し」（小川 1944: 序1）、講義ノートの緒言に次のように記したのである。

人相をいふに面貌鼻目の色形状を挙ぐるの外に、其温容玉の如しとか、癩癬ありとか、苦味走るとかいへば初めて其人を髣髴せしめ得る如く、地貌の特色にも其全体としての印象を捕捉するに非ざれば其面目を躍如たらしむること能はざるなり。人類の土地より被むる影響は此の如き地貌の特色によること頗る多かるべし（小川 1944: 序2）

また、1985（昭和60）年に、当時の東京都立大学理学部地誌学講座の関係者たちによって行われた座談会のなかで、野澤秀樹は次のように発言したのである。

最後にひとこと言わせてください。分析によつても地域をとらえることができると思うが、総合というときには全体的印象を書くしかない。フン

ボルトがそうだ。地理学者は絵かきと一緒にだと言っている。……地誌っていうのは最後はある地域のイメージの地域像を記述することでしょう。それは一人ではかできない。……それはまさに作品であり、芸術であるかもしれない(中村ほか 1986: 260)

つまり田山録弥は、その紀行文論を展開し転回させてゆくなかで、彼自身の認識とは裏腹に、一部のアカデミック地理学者たちの地誌論に近い考え方に到達していたといえるのである。

わたしは田山録弥を民間地理学者としても理解することに、いささか枚数を費やし過ぎたのかもしれない。しかしこれは、「月夜の和歌の浦」を読み解くために必要な作業であったというしかない。田山録弥は、同時代のアカデミック地理学(の萌芽)がもたらした知識水準に、時として反省性を欠いていたにせよ、かなりの程度まで到達していた民間地理学者であったといえる。そして、田山のかかる資質は博文館入社後の『大日本地誌』の編集業務によってのみ開化したのではなく、博文館入社以前より彼はその原初形態とでもいうべきものを宿していた。これらが、「月夜の和歌の浦」を読み解く準備作業としての、本章のとりあえずの帰結である。

III 田山録弥の紀伊半島旅行とその背景

「月夜の和歌の浦」が生み出された田山録弥の紀伊半島旅行は、それ自体で完結したものではなく、1898(明治31)年3月5日から4月25日にかけての、伊勢から京都に至る長い旅の一部をなすものであった。満26歳の田山は、伊勢一身田の真宗勸学院に英語教師として赴任したばかりの親友太田玉茗(1871-1927)の許にしばし滞在し、玉茗と共に伊賀を経由して大和の北東端に位置する観梅の名所月ヶ瀬を訪ね、その後単独で伊勢・志摩・紀伊をめぐる旅に出たのである。そして、さらに神戸・奈良・吉野・京都を巡って帰京し、翌1899(明治32)年1月には玉茗の妹里さ(1880-1969)と結婚して、同年9月には博文館に入館している。だから志摩半島南岸の五ヶ所湾奥より、「到る処の海山の好風景いたく旅の心を慰め候へども、猶恋しきは君があたり候」(1899c: 83)などと記した葉書を投函したりもしたのだが、「はかなく苦しかりし過去の経験を思ひて、ほとほと絶望の思に沈みつゝあるにあらずや」(1899c: 112)と自問自答せざるをえない、

不安定な心理状態での旅であった。不安定さの根源を、後に田山は次のように回想する。

乙羽君も、紅葉山人と同じく、私の小説にはねつから価値を置いて呉れなかつた。……『小説家に君がならうたつてそれは無理だよ、それより紀行文の方が好い』かう言つて、かれは私の紀行文をいつも買つて呉れた。乙羽君にして見ては、実際私の書く小説なんか物になつてゐなかつたに相違なかつた。それがまた私には少なからぬ苦痛であつた(1917c: 154)

田山録弥より2歳年上の大橋乙羽(1869-1901)²⁰⁾は、館主大橋佐平(1835-1901)の娘婿として1894(明治27)年12月に博文館に入館し、編集者として羽振りを利かせていた。田山録弥は、「自分の一生を棒に振るかも知れないが、兎に角やつてみよう」(1917a: 194)という心持ちで文筆を業とする志をもち、前述の旅に出る前に、すでに詩文・小説・紀行文を雑誌や新聞に発表した経験をそれなりに有していた。しかし最も書きたかつた小説は、師事した尾崎紅葉(1868-1903)にも博文館の大橋にも評価されず²¹⁾、むしろ大橋が評価したのは旅好き地理好きな田山録弥の紀行文だったのだ。後に「月夜の和歌の浦」と共に『南船北馬』(1899c)に収録される「日光山の奥」を、田山は大橋の計らいで1896(明治29)年に看板雑誌『太陽』に連載して貰った(2巻1号～3号)。この紀行文が評判を呼び、田山は一先ず紀行文家として評価されるようになってゆく(田山1917c: 154, 390)。そして、月ヶ瀬から紀伊半島を時計回りに一周する旅を綴った一連の紀行文は、後述の如く一部が『太陽』に小出しに掲載され、最終的には全て『南船北馬』(1899c)に収録されて博文館より刊行された。そして同書は好評を博し、その後2年間で二度増刷されるのである(I章参照)。田山は後に、「一廉の紀行文家にして呉れたのも皆な乙羽君の周旋であつた」(1917c: 154)と回想するが、わざわざ観梅の時期に合わせて月ヶ瀬を訪れ、その後紀伊半島を時計回りに一周する旅のプランには、田山録弥に旬の名所や未知の勝地を与えて紀行文を書かせ、社業の隆盛に結び付けようとする編集者大橋乙羽の思惑も入り込んでいたのではなかつたか。そもそも定職に就かず、かといって筆一本で食べてゆけるほどの存在でもなかつた田山録弥に、果して二ヶ月近くにも亘る長期旅行の費用を賄う経済的余裕はあつたのか。旅を終えた後に、結婚した田山を博文館に招いたのも、むろん

彼の紀行文を高く評価していた大橋乙羽の力添えによるものであったのだ（坪谷水哉 1937: 序文 4）。

田山録弥自身は、自らが旅好きな理由を次のように説明する。

私には孤独を好む性が昔からあつた。いろいろな懊悩、いろいろな煩悶、さういふものに困められると、私はいつもそれを振切つて旅へ出た。それにしても旅は何んなに私に生々としたもの、新しいもの、自由なもの、まことなものを与へたてであらうか。……百性、土方、樵夫、老婆、少女、さういふものはすべて私の師となり友となつた。私は美しい世間を見た。又つらい世の中を見た。人間と人間との交際をも早く知ることが出来た（1917c: 387）

II章で引用した「旅行は面白いことです。第一、人間に最も大事な地理を知ります」（1907: 52）という物言いが、じつは田山自身の上述の如き現実経験に根ざしたものであったことが、この引用文から判明する。旅に出る（出される）理由はともかく、一旦旅に出てしまえば、旅先の地理こそは田山にとって人生の学校となったのだ。一方で大事なことは、田山録弥の紀伊半島旅行が、大橋乙羽の思惑や小説の評価をめぐる自らの悩み、かつまた「生々としたもの、新しいもの」への渴望、さらには後述のような歴史地理への志向性といった、時として相反する複数のコンテクストのもとで敢行されたということなのである。

『南船北馬』（1899c）に収録された紀伊半島旅行の紀行文の表題を、便宜的に番号を付して収録順に示すと、①月瀬紀遊、②志摩めぐり、③北紀伊の海岸、④熊野紀行、⑤月夜の和歌の浦、となる。従つて「月夜の和歌の浦」は、紀伊半島旅行の紀行文の最後を飾るかたちで収録されたことになる。このうち、予め『太陽』に掲載されたのは②と④であつて、前者は1898（明治31）年刊行の4巻13号・14号に、後者は同年刊行の4巻18号・19号に連載された（1898a,b）。①と③と⑤は、『南船北馬』（1899c）が初出である。

「熊野紀行」が終わるまでの旅程を、①から④までの紀行文に基づき、丸山（1990）も適宜参照しつつ辿っておこう。予め指摘すべきは、田山録弥がこの旅に陸地測量部の輯製20万分1図（II章参照）を携行していたという実践の現実である。④の「熊野紀行」に次の一節がある。

われは輯製二十万分一の地図を檢して、宮井、花井などいへる村の所在を村人に尋ね、それより右に折れて、北山の清溪を伝ふこと半里、……（1899c: 154）

田山が『新撰名勝地誌』などで旅行者に輯製20万分1図の携行を熱心に奨めたのは（II章参照）、彼自身の若き日の現実経験に根ざすものであったことが、この引用文から判明する²²⁾。まず①の「月瀬紀遊」では、1898（明治31）年3月18日に太田玉茗と共に伊賀上野城下から大和に入り、月ヶ瀬の旅館「かぢ屋」に一泊し、翌日観梅の名所に別れを告げるまでが描かれる。次いで②の「志摩めぐり」では、伊勢一身田を3月26日に発つて志摩磯部に泊まり、志摩半島東南端の大王崎を経て、27日の夕暮れ時に御座岬対岸の浜島港に着くまでが描かれる。③の「北紀伊の海岸」では、浜島港から志摩半島南岸を西行して贅浦に一泊し、次いで紀伊長島の旅館「嵐屋」に泊まり、翌30日には長島から汽船で丸一日紀伊半島東岸を南下して、新宮南郊の三輪崎に上陸するまでが描かれる。④の「熊野紀行」は、旅程中の白眉ともいべき熊野巡りの紀行文であつて、宿泊地の三輪崎から那智山を経て新宮に一泊し、翌4月1日には熊野川を遡つて瀨八丁を舟で探勝し、終点の田戸に泊まるまでが描かれている。

ここまでは簡単なのだが、この後の旅程が問題なのだ。⑤の「月夜の和歌の浦」は、4月6日の午後1時に、田辺の沖合で和歌山方面に向かう汽船に乗り込む場面から始まるのである（IV章参照）。瀨八丁の田戸で、「あゝ万山の中の深夜の静けさよ」（1899c: 166）と詠じつつ4月1日の夜更けを過ごす場面で終わる④の「熊野紀行」との間には、5日間もの空白があり、むろん旅程も連続していない。じつは『太陽』掲載の初出の「熊野紀行」にはこの間の旅程が記され、それに従えば、翌日は田戸から瀨八丁の西北に聳える大和十津川郷の玉置山に登り、十津川の谷を南下して湯の峰温泉に2日間滞在した後、中辺路を西行して潮見峠を越え、4月5日の午前11時頃に田辺の町に入ったことになる（1898b: 107）。翌年の『新声』に発表した短歌集「一歩一景」では、「十重二十重分けて入りにし山々を一重二重と出てゝこそゆけ」という歌に、田山は次のように書き添える（1899b: 23）。

伊勢よりわけて入りたる紀州の山を、一重二重と出でゆきて、かの田辺に出でんとする汐見峠のいたゞきに着きたる時のうれしさは、まことに言葉

にてあらはし難し。

1917(大正6)年の『山へ海へ』では、「那智山、新宮、北山川の上流にある瀨八町、玉置山、本宮、それから中辺地越をして、私は一笠蕭然として田辺の方へと出て行つた」(1917d: 275)とある。1923(大正12)年の『京阪一日の行楽』では「中辺地通りは完全に通つてみた」と書き(1923: 304)、2年後に出た『花袋行脚』では「私は中辺地の方を歩いて二日半かゝりました」と発言し、「潮見峠を越して田辺の海を眼にした時には、ほつと呼吸がつかれたやうな心持がした」と書く(1925b: 265-266, 284)。

それにしても奇妙なのは、『太陽』掲載の「熊野紀行」における田戸から田辺までの旅程部分が、『南船北馬』(1899c)では完全に削除されているというテキストの現実である。後年の『山水小記』(1917e: 273)や『温泉めぐり』(1918b: 228-231)、そして「熊野の山水」(1919: 270-271)の記述から、田山録弥が4月2日に玉置山に登り、十津川に沿って本宮に至り、湯の峰温泉に泊まったことは確実といえる。しかし、じつは翌日の中辺路西行に関する物言いは、日程的にやや無理があるのだ。丸山(1990: 89)や宮内(2002: 84)は中辺路西行説を採り、4月5日は田辺で泊まったと推理するが、4月2日の日暮れに湯の峰温泉に着くと、「此地に滞在すること二日」(田山 1898b: 107)なので、出発は早くとも4月4日の朝になる。ところが田山は後年になって、田辺から湯の峰温泉まで歩くのは「十三四里ある。一日ではちよつとむづかしい」(1923: 305)と告白している。湯の峰温泉から、熊野詣の難所として知られた「岩上逢坂の二嶮嶺を躰え」(1898b: 107)、さらに潮見峠を越えて、4月5日の午前11時頃に田辺に着くのは厳しいのである。

じつは、小林(1976: 610)や杉井(2004: 42)は、田山が串本を経由して田辺に出たとしている。この串本経由説は荒唐無稽に映るが、根拠がないわけではない。旅の3年後に発表した「紀州の山水」(花袋生 1901)で、田山は串本の沖に浮かぶ紀伊大島について次のように書く。

自分は何うかして其島に渡つて、その寂しく恐しい燈台の下に、凄じい波濤の響を聞きながら、恐ろしい現し世の空想に耽りたいと思つたが、其時は波が荒くて向ふに渡れぬといふので、遺憾ながらその目的を達する事が出来なかつた。

これは、自らが紀伊大島の直近まで行ったことを暗

示する物言いである。翌年の『太陽』に発表した「鳥羽より大阪」は、「大阪商船会社の小蒸気船」(1902: 255)で四日市から串本沖を経て大阪に向かう体で書かれた案内記風の作品だが、間歇的に挿入される紀行文風の文章のなかに以下のくだりがある。自らが汽船で田辺に到着したことを暗示するような書きぶりである。

白良の浜近く、瀬戸の鉾山を眼前に認むるあたりまで来ると、段々海に趣があらはれ出して、……其処を過ぐれば、田辺の港。松原の中に汽船問屋の旗が高く翻つて、岸には各地から送つて来たらしい運漕品が山のごとくに積まれてあつた(1902: 264)

さらに1917(大正6)年の『山水小記』では、「熊野川は本宮から新宮まで下つた」(1917e: 271)という記述が登場する。2年後に書かれた「熊野の山水」では、「あくる日は私は本宮から河舟に乗つて、昨日岸に沿うて上つて来た熊野川を静かに下つて行つた。その日も矢張雨であつた」と具体性を帯びたものとなり、「汽船は、勝浦から次第に西して、漸く潮岬近く進んで行つた」と汽船に乗り込んだことが暗示され、「汽船の甲板から見ると、岩は全く串本の漁市にくつついて了つたやうになつて見えた」と橋杭岩を眺めたことが語られる(1919: 272-275)。じつは、その1年前に出た『温泉めぐり』では、「私は帰りに、新宮から勝浦に出て、そこで再び沿海を航行する汽船の甲板に身を託した」と、旅程が明確に示されてもいたのである(1918b: 235)。

串本経由説が現実味を帯びてきたが、では田山録弥はどこに泊まったというのか。後年の物言いではあるが、『山水小記』の以下のくだりが注目される。

しかしこの紀州の旅は非常に雨に悩まされた。殆ど全く雨ばかりであつたと言つても好い位であつた。いつも私はぬれ鼠のやうになつて旅舎に着いた。新宮でも、湯の峯でも、那智でも……。泥濘のはねはキヤラコの黒の羽織の背筋まで上り、蝙蝠傘は殆ど毎日乾くひまもなかつた(1917e: 273-274)

『花袋行脚』では、次の発言が眼にとまる。

中辺路の方は田辺から三四里行つて潮見峠、そこは眺望が好いところです。それを下りると栗栖川の谷、その同じ名の宿があります。摺鉢の底のやうなところです。私はそこに一夜とまりました(1925b: 266)

宿泊地に関する記述ではないが、「中辺地通りは完全に通つてみた」とある『京阪一日の行楽』に、次のような記述もみられる。

中辺地通りは田辺から入つて行つた。下三栖、中三栖、上三栖すべて路は爪先上りののぼりである。で、汐見峠に着く。そこからは紀州の西海岸の一部がはつきりと指さされた。それから峠を下ると、下に栗栖川の一駅がある (1923: 304)

わたしの現段階での推量は、田山録弥は串本付近を汽船で通過したし、また中辺路を歩いて潮見峠を越えもした、というものである。つまり、対立する中辺路西行説 (丸山 1990; 宮内 2002) と串本経由説 (小林 1976; 杉井 2004) を、弁証法的に止揚するというわけだ。前述の『山水小記』に記された宿泊地は、恐らく旅程順に並んでいる。最後の「那智」というのは、三輪崎に泊まった翌日 (3月31日) に訪れた那智山ではなく、湯の峰温泉を4月3日の朝に発ち、本宮から船で新宮まで下り、その後大辺路を南下した先の、那智村の役場がある天満辺りを恐らくさすもので、そこで泊まったのであろう。「その日も矢張雨であつた」(田山 1919: 272) から、「那智」でも「ぬれ鼠のやうになつて旅舎に着いた」のだ。翌4日は勝浦まで歩き、そこから汽船に乗り込んで串本付近を通過し、恐らく田辺まで行ったものと推量される。そして中辺路に入り、田辺側から潮見峠を越えて栗栖川に泊まり、その前後にどこかでさらに一泊して、4月6日の午後1時に「紀州田辺の沖」(1899c: 167) に艇で姿を現したのだ。本宮から串本付近までの旅程を記した、前述の「熊野の山水」では、本宮から田辺に至る道中は、何故かこの部分だけ一人称の「私」が語らない、案内記風の「離れてゐる」文体 (無署名 1911b: 72) で記されている。

本宮から近露といふ、……ところを通つて、逢阪峠、其他もう一つ何とかいふ大きな峠を越して、栗栖川から田辺の海岸へと出て来る路がある。これは中辺地通りと言つて、昔は京畿地方から熊野に行くには、皆なその路を通つて行つたもので、潮見峠から振返つて海を眺めた眺望などは、その間の名勝として、昔から人口に膾炙してゐた (1919: 271)

田山がこのルートを経験したのならば、「何とかいふ大きな峠」に象徴される臨場感のない文章は、逆に書けなかったのではないのか。中辺路を「完全

に通つてみた」(1923: 304) という物言いは、ますますもってありえない。中辺路とは、まさに「熊野の山水」で田山が「私はそこを躓えなかつた」(1919: 266) と認めた、那智山と本宮を結ぶ一大難所たる大雲取越と小雲取越を含めた総称なのだから²³⁾。

田山録弥が、田辺からわざわざ中辺路の潮見峠を越え、再び田辺に戻る旅程をとった理由は、「熊野の山水」で彼が記したように、そこが古の熊野詣の名所であつたという知識を予め仕入れていたからであろう。ここで、田山が歴史地理にも関心を有していたことを思い出そう (II章参照)。じつは、旅行を終えた翌年の『少年世界』に発表され、『続南船北馬』(1901a) に収録された「南朝の遺跡」という文章がある (1899a)。件の大旅行の道中で、折々に南朝の故地を訪ねた経験を記した紀行文で、4月2日に大塔宮護良親王ゆかりの玉置山に登つた話なども含まれるが、そこで田山はすでに以下の如く書いていたのだ。

古人は言つた、歴史を正しく読まふと思ふのなら、自からその地を踏んで見た上でなければ駄目だと。成程それは確言で、自分は此回の旅行で南朝の歴史を更に新しく読み返したやうな心地がした (1899a: 83)

この引用文から、後年「歴史地理といふ学問は面白い」(1909a: 103) と書いた田山の志向性が、紀伊半島旅行の時点ですでに芽生えていたことが判明する。田山の後年のキーワードでいうならば、紀伊大島を「踏査」したかった田山は、等しく中辺路の歴史的名所たる潮見峠も「踏査」してみたかったのだ (II章参照)。満26歳の若き田山録弥は、ロマンティックで欲張りな旅人であった。己は確かに世に聞こえた熊野の深山幽谷を歩き巡つたが、潮見峠越え無き熊野体験は画竜点睛を欠く、と田山は考えたのではなかったか。だから中辺路西行に関する田山の物言いや、件の潮見峠越えの短歌などは、熊野の幾多の山々を越え、ようやく田辺の海を望む峠まで戻りえたという古の感覚の疑似追体験、つまりは汽船で田辺の海に予め到達していたはずの田山録弥のファンタジーに他ならない。「旅行記は文学なり」と、紀伊半島旅行の8年後に田山は断言した (1906: 自序)。報われない文学への想いが、紀伊半島の紀行文に影を落とすということであろうか。「旅行記は空想にてもありぬべし」(1906: 自序) と開き直つた田山は (II章参照)、確かにそれを地で行く人であった。しかし断わつておくと、「地で行く」とい

うのは比喩ではない。なぜなら田山録弥は、一部とはいえず中辺路を歩き、潮見峠の頂を踏みしめていたからだ。白石実三は後年、田山を「錬磨した創作的態度を以つて或ひは歴史地理を考證するなど、広くそして深い幾多の作物を残された」と評した(白石1937: 743)。田山の「創作的態度」から生み出された、中辺路西行や潮見峠越えをめぐるファンタジーは、しかし現地を訪れて過去を想う「踏査」、すなわち歴史地理的フィールドワークの経験を基盤としていたのである。この点は、「月夜の和歌の浦」を読み解く上でもやはり重要になってくる(V章参照)。

IV 「月夜の和歌の浦」における経験とファンタジー

先行テキスト群の荒波に揉まれ、和歌の浦に辿り着くまでに思わぬ時間を費やしてしまった。しかしこの荒波は、無益なものではなかった。田山録弥が物した紀行文が現実にかなる性格をもちうるのかについて、予め大きな示唆を与えてくれたからだ。ただし、『南船北馬』(1899c)に収録された①～④の紀行文(Ⅲ章参照)は、田山自ら「唯わが思を舒べわが情を遣りたるにとゞまる」(1901a: 序1)と反省性ある眼で自己分析する如く、センチメンタルな代物であったかもしれぬが、一定程度の「地図の精確」(無署名1911a: 27)をも併せもち、そこに作為のファンタジーは入り込まない。ところが⑤の「月夜の和歌の浦」だけは、④の「熊野紀行」までとは打って変わって、ファンタスティックな作品に仕上がっているのだ。以下にそのストーリーのあらましを紹介する(1899c: 167-185)。

1898(明治31)年4月6日の午後1時に、「われ」は紀州田辺の沖から和歌山方面に向かう汽船に乗り込んだ。「比井の岬頭」²⁴⁾を廻って紀伊水道に入る辺りから荒波に見舞われ、湯浅沖に至ってようやく穏やかになった。「一輪の大月」が姿を現し、午後9時過ぎに船員が和歌山で下船する乗客の切符を集めにきた。初めて和歌山の土を踏む「われ」は、傍らの中年男より、「今日は西の埠頭に船を着けたる様子なるが」、上陸後和歌山まで「一里はあるべし」と聞かされる。深夜行路を覚悟するも、「海岸の待合所」^{まちあひ}に泊まると聞き安堵する。甲板に出ると、二つの岬に挟まれた静かな入江に月光が「水の如く照りわたって」美しい。幼き時よりその名を耳にし、訪れんと心に決めていた和歌の浦は、手許の輯製20万分1図では和歌山の「二里ほど南」だ。古の「^{めいこう}明光浦」は、もう過ぎてしまったのだろう。や

がて汽船が停まり、おぼろに「松多く、砂白く、面白き風景」がみえるようだ。漕いできた舳に乗り込み、月明かりの下、人々が口々に語る声を聞く。曰く、酷い時化であった、ために「^{あをぎし}青岸の埠頭場に着くる事能はず、余儀なく西岸に着くるやうに湯浅より電報」を打った、今宵のような風は珍しい、等々。埠頭に上陸し、旅亭の主人らしき男に導かれ、おぼろに汽船からみえた松原のはずれの旅亭に着いた。部屋に案内され、座蒲団を敷かんとする少女の「^{あはれ}美しき姿色」に驚き、ここは何処かと問うと「^{にしかし}西岸・・・」と答えるのみ。夕食後、何処とも分らぬ旅亭の近辺を散歩すべく、月夜の松原に分け入り進むと、「^{こもり}こんもりとしたる森」の前に「^{おきな}大なる石の華表」が聳え立っているのがみえた。でも、松原と鳥居の間には「^{かぜ}風情ある入江」が横たわっていて渡れない。美少女も主人も「^{にしかし}西岸」というが、輯製20万分1図にそのような地名はない。波の音を聞きつつ松原をさまようと、「^{かみ}画のことき小橋」が細い入江に架かっているのが向こうにみえた。名前もわからぬその橋を渡り、鳥居の前に佇んでふと振り返ると、「月の光を帯びて恰も銀のことなる海波」に、件の松原が黒く浮き出るように連なって美しい。と、その時にわかに「^{あま}天女ともつかず少女ともつかぬ一人の美しき姿」が現れ、雲に乗って松原の上に昇り、「^{はやし}ヒヤノ」の美しき音色を奏で始めた。さらに、和楽器洋楽器の奏でる「^{おんがく}音楽といふ音楽、悉く聞えたりて」、やがて雲と共に松原の上空に消え失せた。「あゝまことに心ゆく夜なるかな」と感じ入りつつ、さらに岸辺を行くと、「^{かき}釣橋のごとき面白き形したる橋虹のごとくかゝり」、傍らに石碑らしきものが幾つかみえた。もはや夢見心地の「われ」は、そこが何処かはどうでもよくなり、次第に左に曲がる路をそのまま進むと、「^{おんがく}巍然たる二層楼のいと高くいと立派に建てられたる」ものが姿を現してさらに驚いた。もと来た路をようやく引き返し、漢詩を吟しつつ月夜の松原を旅亭に戻ると深夜12時近くになっていた。出迎えた男に、二層楼のある辺りは何という処かと聞いたが返答はない。蒲団に潜り、今一度地図で「^{にしかし}西岸」を探すがやはり分らない。

翌朝、朝食を運ぶ件の美少女に「和歌の浦へは、是処より何里あるにや」と聞くと、和歌の浦はすぐそこだと微笑んでいう。「何とか、^{にしかし}此処は西岸と昨日きゝたるに……」と問い返すと、「西岸とはこゝの小名にて、名高き和歌の浦は、こゝより紀三井寺までの間を言へる」との返事。そうであったのか! 「われは知らずしてその名高き和歌の浦を月夜に見たり」。かの二層楼は有名な「^{あしな}蘆辺の茶屋」であつ

たのか！それから玉津島、紀三井寺など、残る所なく周辺を探勝したが、「月夜の感興」のみ長く心に残った。

以上が、⑤の「月夜の和歌の浦」のストーリーのあらましである。天女と見紛う女がピアノとともに突然現れるなどといった、あからさまな作為のファンタジーが含まれ、④の「熊野紀行」までの紀行文とは一見際立って異質な代物のようにもみえる。「旅行記は文学なり、……旅行記は空想にてもありぬべし」（1906: 自序）という、「転回」以前の田山録弥の声が響いてくる（Ⅱ章参照）。田山は後年、博文館の当主大橋新太郎（1863-1944）²⁵⁾の本邸で『大日本地誌』の編集を担当した当時を回想して次のように書く。

邸の主人が私一人ある所にやつて来た。『小説家なんて駄目だよ、君。紅葉の遺族なんか見たまへ。惨めなものぢやないか。それよりも、博士方の地理の講義でもきいて、真面目に勉強の方が好いよ』主人はこんなことを言った。それほど博士、学士が尊敬されて、そして我々文学書生は卑められてゐたのであつた。……腹の中では、文学の為に、『今に見ろ』と絶叫せずには居られなかつた（1917c: 394-395）

断っておくが、これはあくまで田山録弥の自己経験的現実であって、『博文館五十年史』では、『大日本地誌』は「実に本館の出版物中、有数の大事業」（坪谷善四郎 1937: 168）とされていた。そもそも、大橋家の本邸を編集室にするというのは「前後に曾て其例なき」ことで、田山は「当時多数の同僚から羨まれ」てもいたのである（坪谷水哉 1937: 序文2）。とはいえ、文学に志しながら大橋乙羽には紀行文しか評価して貰えず（Ⅲ章参照）、乙羽の義兄たる新太郎にも上記の如く論され、旅好き地理好きであったはずの田山が悶々としていたことは確かであろう。乙羽の差し金の気配が濃い紀伊半島旅行の道中でも、時に文学への鬱勃たる想いに悩む田山録弥であったわけで、その想いが『太陽』の「熊野紀行」における部分的ファンタジーとして現われ（Ⅲ章参照）、「月夜の和歌の浦」に至って全面的に噴出したとみるのはたやすい。しかし「月夜の和歌の浦」を文学的ファンタジーと断じるのみでは、「文学性」のレンズを単眼的に用いる身振りの反復にしかならず（Ⅱ章参照）、本章でわたしは「民間地理学者」という別のレンズをも用いつつ、「月夜の和歌の浦」における経験とファンタジーを分別し、田山の地理

的経験の意義を明らかにしたい。そう、『闇の奥』の語り手が、架空の丸正百貨店地下食料品売場果物店主出水裕二の語りを分析したように（辻原 2010: 32, 183）。

まず指摘すべきは、田山録弥が和歌の浦に舢舨で上陸したという 1898（明治 31）年 4 月 6 日の夜が、確かに十五夜の満月であったという計算的現実である²⁶⁾。汽船に関しても、青岸に着くはずが和歌の浦に着いたという田山の描写は歴史地理的現実 に即している。青岸とは紀ノ川河口左岸の和歌山港をさし（第 1 図）、1899（明治 32）年の『和歌山名所案内及附近名所』は、青岸を「出船入船絶え間なく汽船亦纜を此処に解く」と説明する（野田 1899: 26）。一方で、1901（明治 34）年 1 月調査の『大日本帝国港湾状況便覧』では、和歌浦港について「臨時汽船寄港アリ」と記される（和歌山県史編さん委員会 1978: 967-969）。すでに 1893（明治 26）年の『明治新撰紀伊繁昌誌』では、「和歌山、大浦の二港及び和歌の湾は船舶を泊するに足る就中和歌山港は本県第一の港にして紀ノ川の海口に當り定期各港に航海する汽船多し」（土井 1893: 16）と書かれ、1898（明治 31）年 4 月 6 日の田山の描写は自らの経験に基づいていたことが窺える。さらに舢舨については、海草郡加太村の谷口三之助名義で書かれた明治 31（1898）年 12 月付の「舢舨賃金御届」に、和歌浦の西隣の出島（第 1 図、第 2 図）の舢舨運賃を三銭から五銭に値上げしたい旨が記され、「運賃表中出島トアルヲ和歌ノ浦ト改メ」と付記されている（和歌山市史編纂委員会 1979: 560-561）。田山録弥が乗った舢舨は、出島に着岸したことがここから実証される。

では田山は何処に泊まり、夜更けに何処を散歩したのか。前述の『大日本帝国港湾状況便覧』では、和歌浦港は「旅館ノ数七戸」と記される（和歌山県史編さん委員会 1978: 969）。また藤本（1993: 138）は、1909（明治 42）年 11 月出版の『紀伊和歌浦明細新地図』（岡田 1909）に依りつつ、「明治四二年頃、和歌浦町の水辺には、芦辺屋・望海楼・米栄・片男波館・島田という料理旅館があった」と記す。田山は埠頭から松原のなかを案内され、「その松原の盡頭なる、二三の人家の並びたる一角」にある「待合所」に泊まったとする。この「まちあひ」という物言いには、簡素な仮の宿泊所といった響きがある。時代はやや下るが、それに該当するのは、『紀伊和歌浦明細新地図』（岡田 1909）に二軒みえる「島田」のうち、御手洗池右下の小さな離れの如き建物ではないか（第 2 図）²⁷⁾。そして「こんもり

としたる森」の前の「大なる石の華表^{とりろ}」とは、恐らく東照宮参道入口の石鳥居であり（第2図）、松原と鳥居を隔てる「風情ある入江」とは、1898（明治31）年縮成修正測図の五万分一地形図「和歌山市」（第1図）にみえる入江²⁸⁾のことであろう。入江には橋が二つ架かり、「画のとき小橋」がいずれかは定かでないが、「釣橋のごとき面白き形したる橋」が不老橋であることは明白である（第2図）。そこから、「路は次第に左に曲りて……海中に突出したる嶋のとき平地」に出現した「巍然たる二層楼」が、「蘆辺の茶屋」であったことは文中で明かされる訳だが、じつは芦辺屋は「和洋混交三階作りの巍然たる高楼」（宇田川 1898: 155）なのであって、宇田川文海（1848-1930）²⁹⁾が1898（明治31）年の『太陽』に嘘を書いていないことは、1893（明治26）年に当の芦辺屋が発行した『紀伊和歌浦図』の挿絵（塩崎 1893）によって明らかである。かかる不作為の、そして「ヒヤノひきたる美しき天女」の作為のファンタジーを含むが、これまでの論述から、「月夜の和歌の浦」に書かれた内容は、ある程度田山録弥の地理的経験に基づくものであったことが了解されよう。そこには、やはり「地図の精確」（無署名 1911a: 27）が含み込まれていたのである。

では、ファンタスティックな「月夜の和歌の浦」のストーリーのなかで、主役の座を主張して譲らない地名「西岸^{にしかし}」はどうか。同時代の名所案内記や、絵図・地図・絵はがきの類に、この地名は管見の限り見出されない（塩崎 1893; 土井 1893; 宇田川 1899; 野田 1899; 内村 1909; 和歌山市立博物館 2005, 2011）。近代の和歌浦や新和歌浦に触れた多くの先行研究も、この地名には言及しない（高嶋 1989, 1990, 1993; 藤本 1993; 重松 2002; 神田 2003a,b; 梶川 2004-10; 額田 2005; 米田 2010）。かかる状況を勘案するならば、「西岸^{にしかし}」とは、文学志向の田山録弥がストーリーを面白くするために作したファンタジーだと結論付けても罰は当たらない。経験から遊離したファンタジーの主役が「地名」とは、さすがに地理好きの田山録弥であって、後年に「小説地理」（II章参照）などと口走った片鱗が早くもそこに窺える、などと訳知り顔で付け加えながら。

しかしわたしは、ここでも「文学性」のレンズを再び一旦取り払い、「西岸^{にしかし}」は若き田山録弥の地理的経験に基づくものと主張したい。この主張は学問的ファンタジーだとして、それは学問的ファンタジーの外側で起きたテキスト的現実によって補強される（辻原 2010: 22）。テキスト的現実とは、紀伊

半島旅行の3年後の1901（明治34）年に、博文館の雑誌『太平洋』に発表された「紀三井寺」（古桐 1901）という文章である。「古桐」の名で書かれ、先行研究によって田山の文章とされたものだ（丸山 1985; 宮内 1989: 24, 1995a: 133）。「月夜の和歌の浦」の翌日（4月7日）に、紀三井寺（第1図）を訪れた経験に基づくと思われるが、前夜の紀行文とは全く異なって一人称の主語が出てこない。「離れてゐる」（無署名 1911b: 72）、案内記風の描写である。

和歌の浦に遊んだものは、必ずこの紀三井寺に呼んで見るべきで、其処に登つた事の無いものとは共に和歌の浦の美を談するに足りないと言つても決して過言ではあるまいと思ふ。其処から見ると和歌の浦の全景は只それ一望の中に盡きて、静かな波に枕んでゐる高楼が有名な蘆辺の茶屋、こもりと茂つて居る森が玉津島明神、右にくろく浮き出て見えるのが和歌町の家屋、遠く海中に突出してその形恰も鶴の嘴を延ばしたかのやうに見えるのが雑質^{にしかし}の崎、その下に疎なはらはら松のあるのが西岸の埠頭と一々明かに指す事が出来て、割愛し難い趣がある。

紀三井寺から見渡した和歌の浦の光景が、まさに「地図の精確と絵画の妙味」（無署名 1911a: 27）を併せもったかたちで描写されている。ここで聞こえてくるのは、「案内記は地理なり……案内記は断して事実ならざるべからず」（1906: 自序）という、田山録弥のもう一つの声である。この文章に、田山にとってのリアルな和歌の浦経験が全面的に反映されているわけではないことは、V章の後続テキスト群の検討から判明するのだが、だから一片のファンタジーも入り込まないとはいいい難いのだが、しかしこの「離れてゐる」文章において、地名を捏造する意味は無い。だから、出島の埠頭やその辺りを「にしかし」と呼び習わす現場の声を、田山録弥は恐らく耳にしたのである。だからこそ田山は、案内記風の「紀三井寺」に、「にしかし」とルビを振られた漢字二文字の地名を記したのだ。「西岸」という漢字表記を、エクリチュールとして田山が目撃したのか、あるいは彼が経験したのは「にしかし」というパロールだけで、漢字表記は聞き取りによって確認したのか、はたまた田山自身が推測して当該の漢字を当てたのか、田山の自己経験的現実とははや復元しようがない。しかし、「かし」には「河岸」という漢字も当てられることから容易に想像されるように、「にしかし」が汽船の寄港地に関する通称地

名であった可能性は高いとわたしは思うし、推測したにせよ、田山もそのように理解したからこそ、「かし」に「岸」の漢字を当てたのだろう。ファンタスティックな「月夜の和歌の浦」において、「にしかし」と発話したのは、田山のモノローグを除けば、汽船の乗客と、乗客を出迎えた旅亭の関係者（主人と美少女）だけであったというテキストの現実は重要である。わたしは「にしかし」が、汽船交通の関係者だけに用いられた「書かれない地名」（上野 2008: 2-6）であった可能性も否定できないと思う。そして、少なくとも田山が「西岸」を、何に対しての「西」であると理解していたのかは、弟子に代作させたかもしれないが（II章参照）、『新撰名勝地誌 卷之九 南海道之部』における「和歌浦町」の説明文から窺うことができる（傍点原文）。

和歌浦町 雑賀川の河口西岸に位し、西は雑賀崎浦に連り、南面して海湾を控ゆ。而も中央には長さ約二十町の砂嘴の突出するありて、和歌浦の内湾外湾を分つ。内湾は東に位し、東岸には即ち名高き紀三井寺あり。現今、人口五千七百六十余、繁華なる街衢をなせり。また、地の東の入江に蘆辺浦と称する地あり。万葉に「わかぬ浦に潮みち来ればかたおなみ蘆辺をさして田鶴なきわたる」と詠ず。名高き蘆辺茶屋またこの地にあり。海苔及び牡蠣を名産とす（田山 1912: 491-492）

予め断っておくが、わたしは上記の引用文の「西岸」を「にしかし」とみているわけではない。これは普通に「せいがん」と発話すべきで、むしろわたしがいいたいことは、この文章では「長さ約二十町の砂嘴」を境にして、「東」と「西」が地域区分されているということである。この砂嘴は、第1図では「和歌浦」の文字が被せられるが、少なくとも第2図以来現在まで「かたおなみ」と呼ばれてきた砂嘴である。かかる地域区分の認識が、現場の人々のそれに基づくのか、田山録弥のそれなのか、はたまた白石実三のそれなのか、実証的に論じることは難しい。しかし大事なことは、少なくとも田山が上陸した出島辺りが、砂嘴の「東の入江」³⁰⁾ に対する「にし」の「かし」として、汽船交通の関係者に認識されうる蓋然性がありえたということだ。かつて Pred (1990) は、労働者階級の失われた言葉遣いを手掛かりに、彼らの生きられた生活世界とその変容を論じて喝采を浴びた。そのタイトル“Lost Words and Lost Worlds”を振って、Philo (1991) が文化論的転回の前史としての社会地理学の系譜を

“Older Words and Older Worlds”と称し、文化論的転回を“New Words, New Worlds”の言葉で象徴的に表現したのは御愛嬌だが、わたしは「にしかし」が、失われた汽船交通関係者の生活世界や空間認識の諸経験、Pred (1990: 94) がまさにいうところの「民間地理学 (folk/popular geography)」（II章参照）を論じる手掛かりになるかもしれないとさえ夢想する（生半な学者のファンタジーかもしれないが）。かかる地名の存在を見逃さず、ルビ付きの漢字表記として現代にまで伝えてくれた満 26 歳の田山録弥を、わたしは民間地理学者の卵として高く評価したいと思う。

「民間地理学」のレンズを単眼的に用いるつもりも、むしろわたしには無い。田山録弥が「にしかし」のパロールに魅入られたとして、だからといって、4月7日の朝までそこが和歌の浦であることに気付かなかったというのはファンタジーであろう。和歌の浦には、1893（明治26）年の時点で年間4,500人の観光客が訪れたとされ、同年に芦辺屋が『紀伊和歌浦図』（塩崎 1893）を観光客向けに刊行し、その2年後には和歌山県による公園整備の対象となり、県立の「和歌公園」として指定されている（高嶋 1993: 117-120）。田山録弥が上陸した時点で、すでに和歌の浦は明治の観光地としてそれなりに賑わっていたはずなのだ。深夜とはいえ、満月の月明かりの下を出島から東照宮の大鳥居を経て不老橋まで散歩し、芦辺屋の高楼をも目の当たりにして、そこが何処か気付かなかったというのは怪しい。そもそも輯製20万分1地図上で、一里強しかない和歌山と和歌の浦の距離を「二里」と見誤ることは、青少年に読図の意義を説く田山録弥にしてありえない（II章参照）。「月夜の和歌の浦」のストーリー構成には、III章で述べた中辺路西行説と同様に、いくぶん無理な部分が含まれていたものであった。

「月夜の和歌の浦」は、田山録弥の鋭敏な直覚に基づく地理的経験と、文学志向の作為のファンタジーが混ざり合った作品として位置付けられうる。満月の夜に舁で和歌の浦に初上陸し、「にしかし」という耳慣れぬ交通地名を耳にした田山録弥は、そこで折からの文学志向が頭をもたげ、自らの印象的な地理的経験を基盤としたファンタジーを書き上げるに至ったのではないのか。これが、「月夜の和歌の浦」をめぐる、本章を書き終えた時点でのわたしの仮説である³¹⁾。

V 和歌の浦表象のその後—断絶と連関—

IV章までの検討で、一見「月夜の和歌の浦」を読み解く作業は充分にやり尽くしたように見える。しかし、じつはそうではない。テキストの意味（意義）は、関連する先行テキストや後続テキストとの関わりのなかでも検討されねばならないのだ。「月夜の和歌の浦」の場合、田山録弥が物した和歌の浦に関する先行テキストは知られていない。これに対して、後続テキストの数は少なくとも、田山はその後も和歌の浦に関して、1898（明治31）年4月6日と7日の経験を踏まえつつ幾たびも文章を物している。後続テキスト群と「月夜の和歌の浦」との関係性を論じることで、後者の意味（意義）の解明をさらに進めることが可能になる。

まず取り上げるべきは、旅の3年後に発表された「紀州の山水」の一節である（花袋生1901）。

紀の三井寺、そこからは日本三景にも重ぐと言はれる和歌浦が只一目に見渡されるので、この風光の明媚なる、その眺矚の穏和なる、紀州の悪灘にのみ見馴れた眼には、これでも海かと疑はれるばかりである。譬へて見れば、丁度相州の金沢八景のやうなもので、昔は海水が深く入り込んだため、余程景色も好かつたらうと思はるが、今は田圃になつて、景致が余程悪くなつたに相違ない。

じつはこれは、IV章で論じた「紀三井寺」（古柄1901）の一週間前に、同じ雑誌『太平洋』に発表された文章である。前者と同じく、一人称の主語が語らない、淡々とした案内記風の紀行文であるが、若き田山の情感が込められた「月夜の和歌の浦」とは一見して大きな落差があるように感じられる。現在の風景から過去の地形環境をいわば歴史地理的に想像（創造）し、そこから現在の風景を冷静に批判する体になっているからだ。まだ『大日本地誌』の編集に携わる前なのだが、すでに歴史地理的フィールドワーク（III章参照）を行う者の眼で同時代の風景をみている感がある。「月夜の和歌の浦」の情感は一体何だったのかと思わせるような、一人称の自己から「離れてゐる」（無署名1911b: 72）文体になっている。

次いで問題とすべきは、代作疑惑との絡みで再三取り上げてきた『新撰名勝地誌』の文章である（II章・IV章参照）。IV章でも一部引用したが、1912（明治45）年刊行の「巻之九 南海道之部」には、和歌

の浦についての10頁にわたる詳細な記述がみられる（1912: 491-500）。「地図の如く」（1906: 自序）に書かれた、情感の入り込まない案内記であり（II章参照）、著者性の判断に苦しむのだが、IV章で論じた地域認識の点では次の説明が興味深い（傍点原文）。

和歌浦 雑賀浦より毛見崎までの江湾をいふ。浦には和歌浦町と紀三井寺村とあり。和歌浦町の南には出島の砂嘴斗出して浦を内湾外湾に分つ。和歌川は砂嘴の東湾に流入せり。見渡せば江水洋々として波濤静穏に、東には名草山紀三井寺を翠微の間に眺め、南には塩津浦、地の島、沖の島、北には双子島、雑賀崎等を展望し、而も、船舶の出入多く、碧水に白帆の点々たる、海浜の緑松と相映じて、一層の妙趣を加ふ（1912: 497-498）

IV章で引用した「和歌浦町」が狭義の和歌の浦をさすとすれば、上記の「和歌浦」は広義のそれというべきで、しかも新和歌浦のみならず紀三井寺村や毛見崎までが「和歌浦」とされ、あまり類例のない地域認識がそこにはみられる。一方、「出島の砂嘴」は第1図の「和歌浦」および第2図の「片男浪」に当たるのであって、「砂嘴の東湾」が和歌川（第1図の藻屑川）とされるのは、逆に出島が「西」とされうる蓋然性の存在をやはり物語っている（IV章参照）。一方で、これが田山録弥の文章だとすれば、「紀州の山水」における風景批判との断絶が問われることになるが、誰が書いたにせよ、純然たる案内記に悪口を書くわけにもゆかない。

次に引用するのは、1914（大正3）年刊行の『日本一周 前編 東海 近畿』の一節である。この引用文は、案内記風の文体をベースにしつつ、紀行文風の文体が時として挿入されるパターンのものであるが（III章参照）、わたしたちは田山録弥の筆致の見た目の豹変ぶりに愕然とすることになる。

和歌ノ浦は、昔のやうな面影はないに相違ないと私は思つてゐる。明光浦などと言つて、歴代の天皇が行幸された時分には、もつとずつと好いところであつたらうと思ふ。つまり入江が段々田やら畠やらになつて行つて了つたのである。私は海の方から来て、玉津島神社のあるところへと行つたが、松も平凡だし、海も平凡だ。こんなところが名高い和歌ノ浦かと思つた。……紀三井寺はちよつと好いところである。そこから見ると、成ほど昔は景色の好いところであつたらうと思はれた。入江が田や畠になつて行つたさまが歴然とし

て指点された。雑賀岬の向ふに突出して出てゐる
 具合から見ても、其時分は好い風景であつたよう
 に思はれた。しかし、今は駄目だ。すつかりわる
 くなつて了つた (1914a: 663-664)

「紀州の山水」と同じく、歴史地理的に想像（創造）
 された過去からみた風景批判が基調をなしている
 が、「入江が田や島になつて行つたさま」という変
 遷史の見方を披露するなど、歴史地理学者の如き振
 舞いは勢いを増している。同時に、和歌の浦の現風
 景を「今は駄目だ」と斬り捨てるなど、風景批判も
 勢いを増し、「月夜の和歌の浦」のファンタジー性を、
 まさに田山録弥自身が逆照射するかのような書きぶ
 りである。むろん、ここにみられる想像（創造）的
 な風景変遷史も、後述の如く学問的ファンタジーに
 他ならず、かつ突き放した風景批判に客観性が宿る
 保証はどこにもない。

3年後に出た『旅』は、前出の『日本一周』が「あ
 れでは完全な旅の案内記にならない。著者の感想や
 観察や低徊が多すぎる」と批判されたので、「今度
 は全くの『案内記』にした。くだけしい感想や観
 察はすべて入れずに」(1917b: 緒言 1) 書いたと田
 山が称するところのものである。しかし和歌の浦の
 書かれ方は、結局次の如きものになつたのであつた。

先づ一番先に、誰でも和歌の浦へと志す。入江が
 大抵田になつて了つたので、昔のやうな面影は見
 ることは出来ないけれど、それでも、玉津島明神
 のあるあたりは、風光が頗る明媚だ。成ほど上方
 の人々が好きさうな静かな柔らかな景色だと誰で
 も思ふ。しかし入江が田になつたので、また田が
 人家になつたので、何処か俗なやうな気がせぬで
 もない。片男波は、明神から右へ行くこと数町の
 ところにある。余り大したものでもない。……
 その近所に宿屋が沢山にある。蘆辺茶屋、望海
 楼、米新などといふのが大きい。大抵はつれ込宿
 であるから、夜中騒がしくつて寝られないやうな
 眼に邂逅さないとも限らない。丁度大阪人に取つ
 ての江島、鎌倉といふ形である。新和歌の浦とい
 ふのが、近頃出来た。つまり和歌の浦の先の雑賀
 岬の此方の方のところだ。紀州の海岸を航行する
 大阪汽船会社の汽船の何うかすると碇泊するこ
 ところだ。此処に来ると、いくらか海らしい海が見え
 る。波濤なども高い (1917b: 205-207)

なるほど「案内記」と称するだけあって、田山は『日
 本一周』(1914a)とは矛盾して玉津島神社付近の
 眺めを誉めてみたり、当時「新和歌浦」として近代
 的開発が進みつつあつた、かつて自らが上陸した出

島から西の海岸美を持ち上げてみたりしている。と
 ころが過去風景の称揚と風景変遷史、そして現風景
 の批判はやはり執拗に繰り返される。加えて「蘆辺
 茶屋」を「つれ込宿」などと表現するに至っては、
 同じ旅館を「巍然たる二層楼のいと高いと立派に
 建てられたる」と感嘆を以て記した、「月夜の和歌
 の浦」の作者の声とは一見信じ難い(IV章参照)。
 玉津島神社の一件もそうだが、テキストには先行テ
 クストが様々なかたちで組み込まれ、著者の声とは
 先行テキストの声だと説く間テキスト性の理論をあ
 ざ笑うかのような、田山録弥の物言いではある。

最後に引用するのは、1923(大正12)年の『京
 阪一日の行楽』の一節である。これはIII章で、「中
 辺地通りは完全に通つてみた」という物言いのファン
 タジー性が指摘された、いわくつきの書物である。

思ひ出されて来るのは、明光ヶ浦と言はれて、そ
 の名が天下にひびきわたつた場合のことであつ
 た。今でこそこんなにつまらなく、平凡に、海で
 もなければ潮水でもないといふやうなものになつ
 て了つたけれども、昔は決してかうではなかつた
 に相違ないのであつた。海水がもつと深く入り込
 んで、ところどころに松が生えたり、島があつた
 り風情のある漁村があつたとして、支那の瀟湘八
 景もかくやと思はれるばかりであつたに相違なかつ
 った。紀三井寺の上あたりから見ると、殊にはつき
 りとその昔のさまが眼に見えるやうに思はれた
 (1923: 299-300)

ここでも田山録弥は、同時代の和歌の浦を扱き下ろ
 しているけれど、重点はむしろ、旅の記憶が鮮明な
 うちに書かれた「紀州の山水」(花袋生 1901)や、『日
 本一周』(1914a)および『旅』(1917b)と同じく、
 過去風景の想像（創造）的復元にある。だから、「支
 那の瀟湘八景もかくや」というファンタジーは文学
 作家というより学者のそれであつて、「外側で起き
 た出来事、つまり現実によって補強され」うる類
 のものである(辻原 2010: 22)。「月夜の和歌の浦」
 の時点で、かかる学問的ファンタジーを田山録弥が
 すでに抱いていたことは、先に触れた「紀州の山水」
 の記述からわかる。このテキストの現実は重要であ
 る。

じつは『京阪一日の行楽』は、田山録弥の昔の旅
 の記憶だけで書かれたわけではない。彼は「凡例」
 でこう記している。

著者曩に『一日の行楽』を著して、東京を中心と
 した一泊二泊の旅行地を書いた。その時、この

著を編まうとする志はひとり手に起つてきた。……で、著者はそれから度々京阪地方に行つてみた。これでも、他郷人が書いたものとしては、出来るだけの踏査をやつたつもりである。……唯、地理はその書いた時のみが精確だと言はれてゐるから、踏査した以後に出来た電車や軌道なども沢山にあるかも知れない(1923: 凡例1-2)

田山録弥の「踏査」(Ⅱ章参照)に関していうと、和歌山へは1920(大正9)年の4月下旬から5月中旬にかけて、妻の里さ(Ⅲ章参照)と共に伊勢・近畿方面を旅するなかで訪れたとされる(小林1983: 9-10, 1984: 86; 宇田川ほか1995: 103)。前述の引用文のすぐ後には、田山が恐らくは妻に現場で語りかけた体で書かれた、次のような文章が続く。

さうだね、それはもう今から三十五六年前だからね。ぐつと変つて了つたらうけれどもね。今考へると、あの新和歌浦のところに紀州通ひの汽船がついたんだね。そして僕はそこに一夜泊つたよ。まだ松なんか非常にあつたね。少くとも玉津島あたりまで、一面に松がぐつゝいてゐたやうだつたね。今は玉津島には、あのとほりのエレベータアがあつたりして、丸で變つたけれどもね。僕は何でも覚えてゐるのは、そこに一夜泊つて、翌日玉津島へ行つて、蘆辺屋の前あたりから、舟で紀三井寺に渡る便があつたけれども、それはやめて、そのまゝぐつと遠廻りをしたことを覚えてゐる。何うしてかと言へば、ふんどしの渡といふ渡頭をわたりたかつたからだよ(1923: 300)

「月夜の和歌の浦」では語られなかった、1898(明治31)年4月7日の詳しい行程の一部がここには語られている。「ふんどしの渡」は1901(明治34)年の「紀三井寺」ですでに触れられ(古桐1901)、「渡頭」に執着する満26歳の地理好きな田山の姿がここでも浮かび上がる。むろん「三十五六年前」というのはファンタジーで、あるいは単なる誤植かもしれないが、語りの時制を『京阪一日の行楽』が刊行された1923(大正12)年とみても25年前の話である。では「エレベータア」はどうか。夏目金之助が経験したかのエレベータは(Ⅰ章参照)、『紀伊毎日新聞』の1916(大正5)年2月13日付記事における望海楼主の、「何処の誰れに売るとは決定して居りませぬが兩三日後鉄材を取り崩す積りですそれでエレベータの運転営業は今日から止めました」という語りを根拠に、同年同月に撤去されたと言われている(高嶋1989: 33-34; 1993: 127-128; 額田2005: 77)。だから田山録弥の「エレベータア」もファ

ンタジーとして片付けるのはたやすいが、「出来るだけの踏査をやつたつもりである」という田山の言を信じるならば、彼が1920(大正9)年に和歌の浦で妻と「エレベータア」を目撃したかもしれぬという学問的ファンタジーは、同年11月に大阪の寝々堂が刊行した『和歌山和歌浦遊覧案内地図』(大淵1920)に、件のエレベータが絵入りで記載されるというテキスト的現実によって補強されるかもしれない³²⁾。かかる多層的ファンタジーに彩られた『京阪一日の行楽』(1923)は、しかしファンタスティックな「月夜の和歌の浦」とは無縁を装う書物であつて、妻に語りかけた体の田山録弥の回想も、1898(明治31)年4月6日深夜の己の姿とは別人であるかのように冷静かつ没情感であり、「にしかし」にも、翌日初めて和歌の浦と分かつたという一件にも触れることがない。

これまで縷々述べてきた、田山録弥の紀行文のドラスティックな変化は、むろん同時代の文士によつても認識されていた。「山の人」なる人物は、1911(明治44)年に次のように書いた(傍点原文)。

田山花袋氏は極めてセンチメンタルな紀行文を書く人であつた。……どちらかと言へば自然を言語で見る方の側の人であつた。……氏の創作に対する考へが違つて、自然主義の主唱者となつたその態度が、やがて紀行文にも現れたものであらう。……主観的の詠嘆的文字で自然を觀てゐたのが、一転して客観的に描察するやうになつたのだ。……氏の好悪愛憎の熾なる念は一物を独断的に觀る傾向を帯びしてゐる様である(山の人1911: 30-31)

田山録弥の紀行文の変化と背景の一面を巧く捉えた物言いである。和歌の浦に関していえば、自己の主観的情感を対象に投影した「月夜の和歌の浦」の如き作品から、代作疑惑に揺れる『新撰名勝地誌』(1912)は措くとしても、『日本一周』(1914a)や『旅』(1917b)の如き、突き放したような没情感の文章へと変化したというわけだ。この枠組みでみれば、『南船北馬』(1899c)に所収された紀伊半島旅行の紀行文群に、作為のファンタジーの有無はあつても質的差異は無いことになる。その反面、「好悪愛憎」に関していえば、「月夜の和歌の浦」とは真逆の仮借無き物言いや、「水戸も和歌山も余り好い感じのする町ではない。馬鹿に広い土族町も厭だ」(1911b: 3)といった「独断的」な言い放ちが、「客観的な描察」であるかどうかは疑わしい。田山自身の言を借りれ

ば、「主観を没せる主観」（1909a: 105）というより、むしろ「主観を没せない主観」のようにみえる。

こうした紀行文それ自体の変化は、田山録弥の紀行文論の転回（Ⅱ章参照）と、部分的には軌を一にしている。すなわち「旅行記は文学なり」（1906: 自序）から、「紀行文は地図の精確と絵画の妙味とを持つたものでなくてはならない」（無署名 1911a: 27）への転回である。「作者と其人格とが即いて居る」文章から、「自己を離れて事象と見る」文章への転回と言い換えてもよい（無署名 1911b: 78）。あくまで部分的な同軌にしか過ぎないことは、自己を離れられない執拗な風景批判から明らかである。

かかる紀行文の変化と紀行文論の転回の背景の一つは、山の人（1911）がいう如く、一般には「自然主義」と目されるところの、客観的かつ俯瞰的な「描写」への田山録弥の没入であろう（Ⅱ章参照）。田山自身は、1917（大正6）年の『東京の三十年』において次のように回顧する。

山水とか、勝地とか言ふよりも、その土地土地の特色、空気、人情などに興味を有つやうになつた……従つて、昔やつた探検、探勝などといふことが幼稚臭くつて馬鹿々々しいやうな気がして来た（1917c: 392-393）

この引用文にいう「空気」とは、少しく説明を要する言葉遣いである（Ⅱ章参照）。田山によれば、かつて己がなしていたような、情感を込めつつ山水を観る類の紀行文には、「知識の感情に蔽はれたところから起つて来る動揺」があり、「一度行き、二度行き、三度行つて、知識が感情に蔽はれないやうになつて、始めて其地特有な動かない万人行つて見ても成程と点頭く空気が出て来る」（無署名 1911b: 76）という。つまり「空気」とは、場所の間主観的な「直覚的印象」（無署名 1911a: 27）なのであって、それは「踏査」（Ⅱ章参照）を重ねて初めて得られるというわけだ。前述の『京阪一日の行楽』における、妻に語りかけた体の文章（1923: 300）などは、そうした志向性が顕われたものといえる。

しかしながら、言説（表象）と実践（身体的行為）にズレやタイムラグが生じるのは、わたしたちと同様に、自己を離れられない田山録弥にお馴染みの現象であって、言説が実践に先行するとは限らず、実践が先行して言説が反省的に後追することもある。「空気」や「自己を離れて事象と見る」ことへの志向性は、1907（明治40）年の「蒲団」や、さらには「旅行記は文学なり」と断言した『日本新漫遊案内』

（1906）より以前の、「紀州の山水」（花袋生 1901）にすでに顕われていたというべきである。過去風景を想像（創造）的に復元し、いま・ここにある己の経験する風景への変遷を俯瞰的に跡付けるという語りは、むしろ風景批判という「主観を没せない主観」の限界をもちつつも、間主観的な場所の語りの萌芽というべきものを内に孕んでいる。「月夜の和歌の浦」と「紀州の山水」の間の見た目の断絶は、明白なようにみえる。後年の田山録弥は、かつてのセンチメンタルな己の文章を、「幼稚臭くつて馬鹿々々しい」と自己批判するかのようである。

しかし、最後にわたしたちは、再び「月夜の和歌の浦」に立ち戻ることになる。「紀州の山水」（花袋生 1901）以降の紀行文と、『南船北馬』（1899c）のセンチメンタルなそれとの見た目の断絶を強調するだけでは、本章の存在意義が問われかねないからだ。「紀州の山水」以降にみられる和歌の浦への否定的評価と、「月夜の和歌の浦」がいかに連関しうるのが明らかにされねばならない。ここで、「月夜の和歌の浦」のストーリーのあらましの最後を思い出そう。わたしは、「それから玉津島、紀三井寺など、残る所なく周辺を探勝したが、「月夜の感興」のみ長く心に残った」と要約した（Ⅳ章参照）。この要約部分は、原テキストではわずか三行にしかならないが、このわずかな翌昼の経験の書き足しに、じつは間テキスト性を読み解くヒントが隠されている。

かくてわれは此処を立ちて、更に和歌の浦のほとりをさまよひ、玉津島、蘆辺の茶屋、紀三井寺など、残る所なく探り盡しぬ。されど月夜の感興のみ長くおのが心に残りぬ（1899c: 184-185）

この最後の書き足し部分の意味（意義）は、本章で縷々引用してきた後続テキスト群を参照することで、初めて十全に解明しうる。つまり「月夜の和歌の浦」の作者は、結局和歌の浦が好かったのは「月夜」だけで、昼間の和歌の浦はつまらなかったよ、と最後に宣告しているのだ。和歌の浦の好きは、もはやファンタジーのなかにしか無いのだよ、というオチである。民間地理学者の卵たる満26歳の田山録弥は、「紀州の山水」（花袋生 1901）に記した過去風景の想像（創造）的復元と風景変遷史へのまなざしを、そして風景批判という「主観を没せない主観」を、考えてみれば当然に1898（明治31）年4月7日の時点で有していた。その結果が、「月夜の和歌の浦」の最後のオチなのであり、そして「紀州の山水」以

降の風景批判なのだ。だから、ここでのファンタジーとは二重のそれである。一つは、「月夜の和歌の浦」における文学青年田山花袋の文学的ファンタジー。いま一つは、「紀州の山水」における民間地理学者の卵田山録弥の歴史地理学的ファンタジー。『旅』(1917b)などの肯定的レトリックは、『新撰名勝地誌』(1912)のそれも含め、田山にとってのリアルな昼間の和歌の浦経験を戦略的に蔽い隠す点で、文学的ファンタジーの香りが仄かに漂う。田山録弥の、地理的経験と、ダブル・ファンタジーのなかの、和歌の浦。リアルな翌昼の和歌の浦経験は、センチメンタルな紀伊半島旅行(IV章参照)の最後を飾る紀行文のネタにはならないと、文学青年の田山花袋は考えたのではなかったのか。だとすれば、ファンタスティックな「月夜の和歌の浦」の深夜の道行きは、その大部分が、翌昼のリアルな和歌の浦経験を蔽い隠す畏として在る。月夜の畏の浦、だとは知らずに読めば、無防備な2010(平成22)年春のわたしの如く、ファンタスティックなテキスト世界に魅いられるだけであつたとしても不思議ではない。しかし同時に、民間地理学者の卵としての田山録弥は、最後の最後に、リアルな昼間の和歌の浦経験の断片をテキスト世界に送り込んだ。ほんの小さな経験の書き足しが、「月夜の和歌の浦」と後続テキスト群を結び付け、ファンタスティックな自己完結的テキスト世界を転倒させる回路となる。

VI おわりに

旅行記を読むとは、生半な仕事ではない。旅行記を書く人物は往々にして異種混濁的であり、旅行記のもとになった旅行は往々にして複数のコンテキストのもとで実行される。旅行記が書かれ刊行されるのも、往々にして複数の人物の意図や思惑が絡んでのことである。そして書かれ刊行された旅行記それ自体も、旅先の風景や人々や出来事を、そして旅程そのものを、在りのままに表象するわけでは往々にして無い。そこには作者の思惑やレトリックが、時に代作者の匿名テキストが、コンテキスト無しでは解読しえない経験の断片が、そして一筋縄ではゆかない仕掛けや畏が、往々にして仕組まれている。

わたしにとって、「田山花袋」の名で書かれた紀行文は、まさにそのような存在として在った。そうした紀行文のうち、本稿では「月夜の和歌の浦」を対象として、その多面的な読解を試みてきた。田山

録弥の紀伊半島旅行と同様に、この読解の旅も長期に亘るものとなったが、その間に明らかになったことを以下にまとめておこう。

田山録弥の「月夜の和歌の浦」は、文学全集の類には収録されず、花袋研究者以外には知られていないテキストであつた。このテキストを生み出した旅好き地理好きの田山録弥は、異種混濁的な存在として在り、文学作家や単なる紀行文家としてのみならず、生成途上にあつたアカデミック地理学の知識を一定程度身に付けた民間地理学者としても理解しうる。田山は「踏査」すなわちフィールドワークを、単なる現況観察に留まらず、場所の歴史を理解する技法としても認識し実践していた。彼は、書かれ表象された「地理」の時間的限界や、その国家理解に際しての同時代的重要性、そして地域比較の意義を認識していたし、地域理解に際しての直覚と知識の双方向的重要性を見抜いていた。知識の一源泉としての地図を重視し、さらには直覚と知識を以て場所の全体的な印象特性を把握するという、近代アカデミック地理学の地誌論に近い考え方にも到達していた。

かかる民間地理学者としての田山録弥の資質は、1898(明治31)年3月から4月にかけての紀伊半島旅行の時点ですでに芽生えていた。その旅行は、伊勢から京都に至る長い旅の一部であり、旅好きな田山の歴史地理への志向や博文館の大橋乙羽の思惑、そして小説の評価をめぐる田山の悩みなど、複数のコンテキストのもとで敢行された。田山は輯製20万分1図を携行し、大和月ヶ瀬から伊勢を經由して志摩半島南岸を歩き、紀伊半島東岸を汽船で南下して熊野に至り、新宮南郊の三輪崎から那智山や瀧八丁、玉置山や湯の峰温泉を廻って、本宮から新宮に舟で戻った。そして勝浦から再び汽船で串本沖を經由して田辺に着き、中辺路の潮見峠を越えて田辺に戻った。紀行文の基調はセンチメンタルな情感にあり、玉置山や潮見峠といった、南朝や熊野詣ゆかりの場所を訪れて古の感覚や歴史を追体験する旅でもあつた。田山は潮見峠で、湯の峰温泉から中辺路を西行してきたかのような短歌を詠み、センチメンタルな熊野の紀行文をファンタジーで彩つてもいた。

こうした紀伊半島旅行を締め括るのが、「月夜の和歌の浦」の旅程であつた。田辺から汽船で和歌の浦の出島に上陸し、田山は翌日に和歌の浦一帯や紀三井寺を訪れた。「月夜の和歌の浦」は、和歌の浦に憧れていた田山が「西岸」という未知の埠頭に上陸し、印象的な月夜の松原を散策して神社や入江や

二層楼を訪れ、ピアノを奏でる幻想的な天女に遭遇し、翌日旅館の美少女から和歌の浦であることを告げられ驚く、という筋立てのファンタスティックな紀行文であった。旅行記を文学とみなした田山は、未知の埠頭や天女といった作為のファンタジーをストーリーに織り込む一方で、自らの鋭敏な直覚や観察力に基づく地理的経験をストーリー構成の基盤としてもいた。とくに、「にしかし」は汽船交通関係者が用いた交通地名の可能性が高く、それを拾い上げた満 26 歳の田山は民間地理学者の卵と呼ぶにふさわしい。

しかし「月夜の和歌の浦」には、その後のテキスト群を参照することで初めて判る、大きな罣が仕組まれてもいた。田山の昼間の和歌の浦経験は、「月夜の和歌の浦」の称揚とは一変し、風景批判を基調とするものであった。それは田山が歴史地理学的な眼で、和歌の浦の過去風景を学問的ファンタジーとして想像（創造）的に復元し、風景変遷史をイメージすることから生じた。「月夜の和歌の浦」は、センチメンタルな紀伊半島旅行の紀行文の最後を飾るべく、昼間のリアルな和歌の浦経験を蔽い隠すためにファンタスティックに構築されたとみなしうる。ただし、リアルな翌昼の和歌の浦経験の断片を、田山はテキスト世界に民間地理学者の卵として忍ばせてもいた。それは、「月夜の和歌の浦」を称揚する体で書かれたファンタスティックな作品世界へと、無防備な読者を連れ込むテキストの罣から、間テキスト性の回路を通じて読者を連れ出す導きの糸として在る。

以上が本稿のまとめである。わたしは可能な限り実証的に論を進めるべく努力してきたが、本稿それ自体がファンタジーだと批判されるかもしれない。確かに本稿には、経験の裏付けを充分にもたない仮説的言明や推量が多いことは否めず、今後は学問的ファンタジーの外部で生じた経験によって、当の学問的ファンタジーが補強される必要がある。

その一方で、そもそもファンタジーとは、文学的なそれであれ、学問的なそれであれ、畢竟、経験と想像力から生み出される。経験を基盤としつつ、文学的想像力からは文学的ファンタジーが、そして地理学的想像力からは、地理学的ファンタジーが。経験は小説の糧と田山録弥が説く如く（II 章参照）、経験との一切の繋がりを絶った文学的ファンタジーはありえない。片や、経験に足場を据えつつ一旦その場の経験を超越、他日の経験のバックアップを俟つ地理学的ファンタジーは、むしろその場の経験からの距離に価値が存する³³⁾。畢竟、両者の差異は

経験からの距離に依存するが、経験に繋ぎ止められざるをえない文学的ファンタジーと、経験から一旦距離を置こうとする地理学的ファンタジーとの、相互の隔たりはむしろ狭まる。だから「経験とファンタジー」という本稿の標題は、二重の意味を有する。一つは、田山録弥の経験とファンタジー、もう一つは、他ならぬわたし自身の経験とファンタジーである。

注

- 1) http://www.bunka.go.jp/ima/press_release/pdf/104_shiryo_01.pdf (最終閲覧日: 2011 年 1 月 30 日)
- 2) 本稿で引用した田山録弥 (1872-1930) の著作は、全て末尾の文献表に発行年月日順に掲載した。発行年月日の考証は宮内 (1989, 1995a) によった。引用に当たっては、できる限り「田山」の表記を省略して示した。また、田山の伝記的事項については宇田川ほか (1995) を参照した。
- 3) 「月夜の和歌の浦」を所収する単行本のうち、『南船北馬』(1899c) は 1901 (明治 34) 年 6 月に第三版が刊行された。『山水紀行筆行脚』(文献会編輯所 1920) と『花袋紀行集 第一輯』(1922) は、重版が確認されていない (宮内 1989: 100-101, 213-214, 313-314)。
- 4) 島津 (2010: 23-24) で指摘したように、文章とそれ以外の表象を「テキスト」として同一視することには限界があり、殊にテキストとされるものの意味作用の明晰さは前者と後者で大きく異なる。一方で、両者は①～⑥の分析の俎上に等しく載せられる点で通底する。ここでは、如上の差異を踏まえつつ両者に「テキスト」という地位を与える。
- 5) なお、多様な地物の関係態としての「景観」もテキストとして読まれるが、何かを一次的に表象すべく生産されたとは限らない関係態をテキストとみなすとき、景観には読み手の脳内表象 (往々にして先行テキスト) が無媒介に投影され、しばしば当の読み手自身がテキストの一次的な生産者と化すことになる (かかる事態それ自体が、⑥の読みの対象となる)。むしろ、文章・絵画・写真・映像・彫塑をテキストとみなすときでも、読み手の脳内表象はそれらテキスト群に様々なかたちで投影されるが、それは二次的なレヴェルで起こるのであって、読み手がテキスト群の一次的な生産者になるわけではない。
- 6) このファンタジーとは、経験から相対的に離れた広義のあらまほしき仮構の謂であって、史資料の裏付けを欠く歴史地理的叙述や、さらなる経験的裏付けを俟つ仮説的言明の類もファンタジーに含まれる。本稿にファンタジーなどという概念が登場することに面喰う読者も多かろうが、田山録弥の紀行文論や紀行文それ自体、そして「月夜の和歌の浦」を読むに当たって不可欠の概念であることは、II 章以下の論述によって了解されよう。しかし、

- 標題の「経験とファンタジー」という分析視角（視覚）は、もう一つの知的源泉をも有しているのだ。それは1945（昭和20）年7月にカリマンタン（ボルネオ）島北部で消息を絶った、東京帝国大学理学部地理学科出身の民族学者鹿野忠雄（1906-?）をモデルとする、辻原登の近作『闇の奥』（辻原2010）であり、刊行の4年前に書かれた「四人の幻視者」と題する文章である（辻原2006）。辻原は後者において、失踪後に刊行された鹿野の論文集『東南亜細亜民族学先史学研究 第一巻』（鹿野1946）を、「科学と夢想がみごとに織り合わさった、めくるめくような本である」と評した。わたしには、この物言いはむしろ、和歌山ネタが横溢する『闇の奥』（辻原2010）にそのまま当てはまるように思われる。
- 7) 白石実三の伝記的事項については、群馬県立土屋文明記念文学館（2002）を参照。白石の物言いは、全十巻の『新撰名勝地誌』を『新選日本名勝地誌』といふ十二巻もの（白石1934: 6）とするなど、一見信頼の置けないもののようにも映る。しかし、事はそれほど簡単ではない。『新撰名勝地誌』は、1893（明治26）年から1901（明治34）年にかけて、同じ博文館から先に刊行された『日本名勝地誌』（全十二巻）の後継というべき存在であり、田山録弥は後者の「第十一編 琉球之部」を単独で執筆していた（1901b）。そして『新撰名勝地誌』も、当初は『日本名勝地誌』と同じく全十二巻が予定されていたのであって、「巻之十 北海道之部」の巻末広告には、「続刊」として「巻十一●北海道及樺太」と「巻十二●台湾及琉球」（黒丸原文）の記載がみられる（1914b: 広告3）。共に未刊のままだが、白石の「十二巻もの」という発言は単純な間違いではない。白石の言い分を信ずるならば、『新撰名勝地誌』の既刊10冊は全て代作ということになるのだが。
 - 8) 直近のわたしの論考（鳥津2010）や本稿の如く、広義の「地理学」を社会の各層のなかに時として現在主義的に見出してゆく企ても、それが反省性を欠く状態でなされる場合には、同じ一元化的レッテルを素朴モダニストとして貼り付けるだけの仕事に陥る潜在的危険性を有している。しかしわたしは、こうした企てを、むしろ社会文化事象の異種混濁性を際立たせるための一手段として用いているつもりである。例えば本稿では、田山録弥を「民間地理学者」として一元的に染め上げようとするのではなく、むしろ彼の異種混濁性を構成する一要素として、「民間地理学者」というレッテルを彼の人格の一部分にのみ貼り付けたいというのがわたしの意図である。
 - 9) ちなみに、popular geographiesを「民間地理学」と和訳したからといって、「民間地理学者」をそのままpopular geographer(s)と英訳したりすると「人気のある地理学者」といった意味にとられる可能性が高く、lay geographer(s)やfolk geographer(s)、あるいはamateur geographer(s)などとするのが妥当であろう。
 - 10) 博文館の社員を「館員」と称し、入社を「入館」と称したことについては、坪谷（1985）を参照。
 - 11) 小林（1967: 22）は田山の『大日本地誌』への関与につ
- いて、「人文のデータを揃えて人文地理方面の記述をするのが仕事となった。彼としてはできるかぎりの文才を発揮して文章を練った」と書く。岡田（2008: 185）に至っては、田山が「ほぼ全巻の『人文』編や『地方誌』編のかなりの部分を執筆した。……巻三だけは執筆していないが、編纂補助は行なっている」とする。しかし、両者が依拠する『東京の三十年』（1917c）のなかで、田山は白石（1934: 6）の如くに「書きました」とは一言も書いていない。むしろ典拠として挙げるべきは『大日本地誌』の「緒言」であって、全十巻のうち「巻八」と「巻九」に田山録弥の限定的な著者性に関する情報が記されるのみである。前者には「産業の章にありては故石渡延世氏、大関久五郎氏、田山録弥氏の筆を煩はせしこと甚大なるものあり」（山崎・佐藤1911: 緒言2）と記され、後者には「田山録弥氏は産業の一部と地方誌とに執筆せられ」（山崎・佐藤1913: 緒言2）と記される。それ以外は、「巻一」に「文学士齋藤隆三文学士七種泉三郎田山録弥の諸氏は専ら人文に関する材料の拾集編纂の事に当り」（山崎・佐藤1903: 緒言1-2）とある如く、著者性の判定し難い「編纂」なる表現しか用いられていない。わたしがここで言いたいことは、著者性の判定は資料的な根拠付けと慎重な考証をもってなされるべきだ、ということに尽きる。
- 12) この引用文は『インキ壺』に収録されている（1909b: 163-164）。
 - 13) 田山の「描写」論それ自体の問題性については、大杉（1995）を参照。
 - 14) 石橋の経歴については、岡田（2002: 24-26）を参照。
 - 15) 田山録弥は、後にこう書いている。「書は、すべてこの世の中にある本は、悉く實際生活の状態の経験の「あらはれ」である……自分の経験したのではないが——他人の経験したのではあるが兎に角本には生活に於けるある経験の書かれてあることは確かである」（1917a: 195-196）。テキストの表象性とその限界の一端についての、田山の明晰な洞察を示す物言いである。「評論だつて、僕が一番かも知れない」（白石1934: 7）という田山の自負には根拠がある。
 - 16) 代作疑惑に揺れる『新撰名勝地誌』であるが、書物全体の枠組みを示す「凡例」までもが代作であるとは考え難く、わたしはそこに田山録弥の著者性を措定したい。
 - 17) この引用文は『毒と薬』に収録されている（1918a: 138）。
 - 18) この文章は『花袋文話』に収録されている（1911c: 233-234）。
 - 19) 輯製20万分1図は、「明治維新以後、日本全国をはじめ、ほぼ同じ精度によって、比較的短い期間に作成し、被った中縮尺地形図」（清水1983: 1）であった。つまり、汎用性をもつ初めての近代的地図だったのである。
 - 20) 大橋乙羽については、遠藤（1983）、坪谷（1985: 58-60）、坪内（2001）を参照。
 - 21) 坪内（2001: 164）はこの点に関して、「編集者乙羽の眼力は、あくまで正しい」と言い放っている。わたしはむしろ、『新撰名勝地誌』の一件で触れた弟子の白石実三（II

- 章参照)が、「極度にストーリーを排斥し、脚色を破壊し、小説なるものをつまらないものにしたのが、同じ花袋翁であるが、しかも、半面においては、翁ほど地理歴史に興味をもつた文士もなかつたのです(白石 1934: 7)と語ったことに興味をもつ。白石自身、「地理ロマンス、地誌小説」(白石 1934: 6)を標榜していたことにも。
- 22) 群馬県館林市の田山花袋記念文学館には、田山録弥が使用したと思われる輯製 20 万分 1 図が多数所蔵されている(田山花袋記念館 1989: 149-162)。そこに、彼が紀伊半島旅行で実際に使用した可能性のある地図が一枚含まれている。それは明治 21 年輯製製版・明治 28 年印刷発行の『田辺』図幅であって、赤鉛筆で県境をなぞった書き込みがある。
- 23) 田山は 1922 (大正 11) 年の『温泉周遊 西の巻』でも、大雲取越・小雲取越について「いや、あれは行きません」と明言している(田山・中沢 1922: 157)。
- 24) これは紀伊半島の西端をなす日ノ御崎のことである。『紀伊続風土記』は、日ノ御崎を「又比井の御崎といふ」と記している(和歌山県神職取締所 1910: 489)。
- 25) 大橋新太郎については、坪谷 (1985) を参照。
- 26) ウェブサイト The Moon Age Calendar の「月と太陽の位置推算 Ver.1.37」による。<http://www.moonsystem.to/checkup.cgi> (最終閲覧日: 2011 年 3 月 2 日)
- 27) 時代は下るが、1917 (大正 6) 年 3 月に第二版が刊行された『和歌浦遊覧の友』は、「島田旅館」について「俗に御旅所と称し、松樹鬱蒼たる所にあり、春は、静穏なる海上を望み……」と記す(土井 1917: 73)。これは、第 2 図の御手洗池右下の「島田」にフィットする物言いである。
- 28) この入江は、1909 (明治 42) 年の『紀伊和歌浦明細新地図』(第 2 図)では、大半が埋め立てられてしまっている。
- 29) 宇田川文海については、大塚ほか (1969) を参照。
- 30) これは田山 (1912: 491) の説明では「雑賀川の河口」となっているが、第 1 図では「藻屑川」と表記されている。
- 31) 『南船北馬』(1899c)における「月夜の和歌の浦」の比重についての、興味深いデータを紹介しておこう。同書には 16 枚の口絵写真が掲載されるが、このうち「月瀬紀遊」から「月夜の和歌の浦」に至る紀伊半島旅行に関する写真は 3 枚で、うち和歌の浦が 2 枚、和歌の浦の北にある五百羅漢寺 (第 1 図) が 1 枚である。月ヶ瀬から瀨峡に至る写真は無い。本文は 488 頁であり、うち「月夜の和歌の浦」は 19 頁で、割合は 3.89% となる。ところが和歌の浦関係の写真の割合は全写真の 18.75% で、本文に比して著しく高い。
- 32) とはいえ、むろん事はそれほど簡単ではなく、複数の史料から発せられる声は複数である。1917 (大正 6) 年 3 月 30 日刊行の『和歌浦遊覧の友 (第二版)』には、「玉津島を眺め奠供山を賞して詩歌に吟詠せし所も、一時俗客の遊観場とならんとせしが、心ある者の批難多く為に昔の俤を維持するに至りぬ」とある(土井 1917: 11-12)。すでにエレベータは撤去されたとも読めるが、一方で同年 9 月 15 日刊行の『和歌山和歌の浦遊覧案内』は、「先年有志の発起により玉津島神社々畔にエレベーターを設

け遊覧登山者の便を計ることゝなれり」(野田 1917: 26)と記す。しかしまた、1919 (大正 8) 年 7 月 20 日刊行の『名所案内 和歌浦と新和歌浦』には「左手の山は奠供山曾て望海楼旅館のエレベーターのあつた所」(浜口 1919: 2)と書かれ、1928 (昭和 3) 年刊行の『エレベーター (建築学会パンフレット 第二輯第一号)』では、「大正六年六月に撤去された」と記される(堀 1928: 13)。エレベータが営業を止めたのは、『紀伊毎日新聞』の伝える如く 1916 (大正 5) 年 2 月だとして、それが物理的に撤去されたのがいつなのかは、現段階では判断し難いのである。さらに田山録弥が、現実には和歌の浦でそれを眼にしたとして、それがいつなのかも議論の余地が残されている。なぜなら田山は、1918 (大正 7) 年 10 月にも奈良・京都・大阪を廻る旅に出ており(宇田川ほか 1995: 102)、その折に大阪から日帰りして和歌の浦を訪れた可能性もあるからだ。ちなみに、1917 (大正 6) 年刊行の『旅』で、田山は「南海線の線路は、電車をひいてるので、頗る軽快で気持が好い。和歌山までは、隣へでも行くやうな心持で行ける」と書いている(1917b: 204)。

33) その場の経験からの距離に価値が存する、という点に関して、精神分析・地質学・マルクス主義を「三人の師」と仰ぐブリュッセル生まれのユダヤ人は次のように述べる。「わたしが三人の師から学んだのは、経験 (le vécu) と実在 (le réel) という二つの層の間はつながっておらず、実在を手に入れるためには一旦経験から離れるべきであり、その後に経験を、一切の感情を取り去った客観的総合 (synthèse objective) のなかへと再統合すべきだ、ということであった」(Lévi-strauss 1955: 62-63)。

文献

- 青田寿美 2002. 田山花袋 浦西和彦・半田美永編『紀伊半島近代文学事典一和歌山・三重』141-142. 和泉書院。
- 犬養 孝 1993. 和歌の浦は大切な宝物。園田香融・藤本清二郎・村瀬憲夫編『和歌の浦一歴史と文学』1-2. 和泉書院。
- 上野智子 2008. 『小さな地名の調べかた—メディアモリで調べ、アカレンで踊り、ダテマエで待つ』和泉書院。
- 宇田川昭子・丸山幸子・宮内俊介 1995. 年譜. 定本花袋全集刊行会編『定本花袋全集 別巻』75-108. 臨川書店。
- 宇田川文海 1898. 紀泉名勝案内. 太陽 4(24): 154-164.
- 宇田川文海 1899. 『南海鉄道案内』南海鉄道。
- 内村義城 1909. 『和歌山と和歌浦』木国史談会編輯局。
- 遠藤綺一郎 1983. 大橋乙羽. 米沢市史編さん委員会編『続・米沢人国記—近・現代篇』93-97. 米沢市史編さん委員会。
- 大杉重男 1995. 描写・写生文・美文—田山花袋「描写論」の盲目と明視. 論樹 9: 17-28.
- 大塚豊子・松葉辰子・三浦阿き子 1969. 宇田川文海. 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第31巻』232-265. 昭和女子大学光葉会。
- 大淵善吉 1920. 『和歌山和歌浦遊覧案内地図』寝々堂旅行案内内部。
- 岡田俊裕 2002. 『地理学史—人物と論争』古今書院。

- 岡田俊裕 2008. 山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌』の地理学史的意義. 高知大学教育学部研究報告 68: 179-188.
- 岡田久楠 1909. 『紀伊和歌浦明細新地図』岡田久楠.
- 小川茂樹 1944. 序. 小川琢治『日本群島』序1-5. 弘文堂書房.
- 梶川哲司 2004-10. 漱石の作品にみる和歌山—近代日本の思想家・夏目漱石の教材化にあたって. 和高校研会報 54: 60-73, 55: 21-36, 56: 22-39, 57: 43-59, 58: 23-42, 59: 2-13, 60: 2-19.
- 花袋生 1901. 紀州の山水. 太平洋 2(7): 3.
- 金坂清則 2010. 旅行記と写真展—イザベラ・バード論の展開. 地理 55(3): 89-97, 55(4): 110-120.
- 鹿野忠雄 1946. 『東南亜細亜民族学先史学研究 第一巻』矢鳥書房.
- 茅原 健 2006. 田山花袋の「小説地理」をめぐる. 花袋研究会々誌 24: 1-8.
- 神田孝治 2003a. 観光都市としての和歌山. 大阪春秋 112: 132-139.
- 神田孝治 2003b. 近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景. 財団法人アジア太平洋観光交流センター編『第9回観光に関する学術研究論文入選論文集』1-14. 財団法人アジア太平洋観光交流センター.
- 群馬県立土屋文明記念文学館編 2002. 『白石実三とその時代』群馬県立土屋文明記念文学館.
- 古桐 1901. 紀三井寺. 太平洋 2(8): 3.
- 小林一郎 1976. 『田山花袋研究—博文館入社へ』桜楓社.
- 小林一郎 1980. 『田山花袋研究—博文館時代(三)』桜楓社.
- 小林一郎 1983. 『田山花袋研究—「危機意識」克服の時代(三)』桜楓社.
- 小林一郎 1984. 『田山花袋研究—年譜・索引篇』桜楓社.
- 小林高寿 1967. 山崎直方と田山花袋の邂逅. 教育地理 10(10): 20-24.
- 塩崎毛兵衛 1893. 『紀伊和歌浦図』塩崎毛兵衛.
- 重松正史 2002. 『大正デモクラシーの研究』清文堂.
- 島津俊之 2009. 『明治近代地理学誌研究』大阪市立大学大学院文学研究科博士論文.
- 島津俊之 2010. 『挿絵でみるベルギー』と「ボタニックの丘からの眺め」—19世紀後半の地理書と挿絵をめぐる学史的考察. 和歌山地理 29: 6-42.
- 清水靖夫 1983. 『輯製20万分1図一わが国地図作成史上からみた』柏書房.
- 白石実三 1934. 崎人伝・地誌小説. 衆文 2(6): 6-9.
- 白石実三 1937. 解説. 花袋全集刊行会編『花袋全集 第十六巻』737-743. 花袋全集刊行会.
- 杉井和子 2004. 田山花袋の旅と熊野. 国文学解釈と鑑賞 69(3): 39-46.
- 杉浦芳夫 1992. 『文学のなかの地理空間—東京とその近傍』古今書院.
- 高嶋雅明 1989. 近代の開発と和歌浦. 和歌山地方史研究 17: 32-37.
- 高嶋雅明 1990. 和歌浦開発と和歌浦土地株式会社—若干の資料紹介と覚え書. 紀州経済史文化史研究所紀要 10: 25-40.
- 高嶋雅明 1993. 近代の和歌浦. 蘭田香融・藤本清二郎・村瀬憲夫編『和歌の浦—歴史と文学』115-139. 和泉書院.
- 田山花袋 1898a. 志摩めぐり. 太陽 4(13): 83-92, 4(14): 84-90.
- 田山花袋 1898b. 熊野紀行. 太陽 4(18): 146-154, 4(19): 101-107.
- 田山花袋 1899a. 南朝の遺跡. 少年世界 5(2): 82-97.
- 田山花袋 1899b. 一步一景. 新声 1(5): 18-23.
- 田山花袋 1899c. 『南船北馬』博文館.
- 田山花袋 1901a. 『続南船北馬』博文館.
- 田山花袋 1901b. 『日本名勝地誌 第十一編 琉球之部』博文館.
- 田山花袋 1902. 鳥羽より大阪. 太陽 8(8): 253-264.
- 田山花袋 1906. 『日本新漫遊案内』服部書店.
- 田山花袋 1907. 旅行と地理. 少年世界 13(9): 52-57.
- 田山花袋 1909a. インキ壺. 文章世界 4(12): 100-105.
- 田山花袋 1909b. 『インキ壺』久久良書房.
- 田山花袋 1910a. 『新撰名勝地誌 卷之一 畿内』博文館.
- 田山花袋 1910b. 『新撰名勝地誌 卷之三 東海道東部』博文館.
- 田山花袋 1911a. 春雨にぬれた紀州の旅. 文章世界 6(5): 12-15.
- 田山花袋 1911b. 町. 文章世界 6(11): 2-6.
- 田山花袋 1911c. 『花袋文話』博文館.
- 田山花袋 1912. 『新撰名勝地誌 卷之九 南海道之部』博文館.
- 田山花袋 1914a. 『日本一周 前編 東海 近畿』博文館.
- 田山花袋 1914b. 『新撰名勝地誌 卷之十 西海道之部』博文館.
- 田山花袋 1917a. 新小説作法 一 読書と実生活. 青年文壇 2(1): 194-199.
- 田山花袋 1917b. 『旅』博文館.
- 田山花袋 1917c. 『東京の三十年』博文館.
- 田山花袋 1917d. 『山へ海へ』博文館.
- 田山花袋 1917e. 『山水小記』富田陽堂.
- 田山花袋 1918a. 『毒と薬』耕文堂.
- 田山花袋 1918b. 『温泉めぐり』博文館.
- 田山花袋 1919. 熊野の山水. 野村久太郎編『夏の旅(新家庭臨時増刊)』264-275. 玄文社.
- 田山花袋 1922. 『花袋紀行集 第一輯』博文館.
- 田山花袋 1923. 『京阪一日の行楽』博文館.
- 田山花袋 1925a. 『小説作法(文芸及思想講習叢書)』松陽堂.
- 田山花袋 1925b. 『花袋行脚』大日本雄弁会.
- 田山花袋・中沢弘光 1922. 『温泉周遊 西の巻』金星堂.
- 田山花袋記念館 1989. 『田山花袋記念館 収蔵資料目録Ⅰ』館林市教育委員会.
- 辻原 登 2006. 四人の幻視者. 日本経済新聞 2006年1月22日: 44.
- 辻原 登 2010. 『闇の奥』文藝春秋.
- 坪内祐三 2001. 編集者大橋乙羽. 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』153-167. 思文閣出版.
- 坪谷水哉 1937. 序文. 花袋全集刊行会編『花袋全集 第十五巻』序文1-4. 花袋全集刊行会.
- 坪谷善四郎 1937. 『博文館五十年史』博文館.
- 坪谷善四郎 1985. 『大橋新太郎伝』博文館新社.
- 土井吉十郎 1893. 『明治新撰紀伊繁昌誌』大橋謙之助.
- 土井林之助 1917. 『和歌浦遊覧の友(第二版)』帯伊書店.
- 中村和郎・野澤秀樹・堀 信行・小林 茂・岩田修二・片平博文・稲田彦彦・櫛谷圭司・水野 勲 1986. 地誌学を考える. 中村和郎・岩田修二編『地誌学を考える—戸谷 洋先生退職記念地誌学論文集』243-261. 古今書院.

額田雅裕 2005. 和歌浦における景観の変遷. 和歌山市立博物館編『和歌浦—その景とうつりかわり』73-80. 和歌山市教育委員会.

野田華公 1917. 『和歌山和歌の浦遊覧案内』津田書店.

野田文六 1899. 『和歌山名所案内及附近名所』野田文六.

浜口 彌 1919. 『名所案内 和歌浦と新和歌浦』枇榔助彌生堂.

半田美永 1987. 『紀伊半島をめぐる文人たち—近代和歌山の文学風土』ゆのき書房.

半田美永 1993. 和歌の浦と近代文学. 園田香融・藤本清二郎・村瀬憲夫編『和歌の浦—歴史と文学』231-253. 和泉書院.

半田美永 2005. 『文人たちの紀伊半島—近代文学の余波と創造』皇學館出版部.

藤本清二郎 1993. 『和歌の浦百景—古写真でみる「名勝」の歴史』東方出版.

文献会編輯所 1920. 『山水紀行筆行脚』富文館.

堀 覚太郎 1928. 『エレベーター(建築学会パンフレット 第二輯第一號)』建築学会.

丸山幸子 1985. 紀三井寺[解説]. 文学研究パンフレット花袋とその周辺 2: 4.

丸山幸子 1990. 田山花袋紀行年表. 文学研究パンフレット花袋とその周辺 13: 85-92.

宮内俊介 1989. 『田山花袋書誌』桜楓社.

宮内俊介 1995a. 著作年表. 定本花袋全集刊行会編『定本花袋全集 別巻』109-224. 臨川書店.

宮内俊介 1995b. 書誌. 定本花袋全集刊行会編『定本花袋全集 別巻』225-338. 臨川書店.

宮内俊介 2002. 全紀行文解題稿(二). 文学研究パンフレット花袋とその周辺 36: 83-99.

無署名 1911a. 新しき紀行文. 文章世界 6(6): 24-27.

無署名 1911b. 現代の紀行文. 文章世界 6(14): 72-81.

山崎直方・佐藤伝蔵編 1903. 『大日本地誌 卷一』博文館.

山崎直方・佐藤伝蔵編 1911. 『大日本地誌 卷八』博文館.

山崎直方・佐藤伝蔵編 1913. 『大日本地誌 卷九』博文館.

山の人 1911. 紀行文家の文章. 文章世界 6(11): 29-33.

米田頼司 2010. 『和歌祭—風流の祭典の社会誌』帯伊書店.

和歌山県教育委員会ふるさと教育副読本編集委員会 2009. 『わかやま発見—ふるさと教育副読本』和歌山県教育委員会.

和歌山県史編纂委員会 1978. 『和歌山県史 近現代史料 四』和歌山県.

和歌山県神職取締所 1910. 『紀伊統風土記 第二輯』帝国地方行政学会出版部.

和歌山市史編纂委員会 1979. 『和歌山市史 第8巻 近現代史料 II』和歌山市.

和歌山市立博物館編 2005. 『和歌浦—その景とうつりかわり』和歌山市教育委員会.

和歌山市立博物館編 2011. 『写真にみるあのころの和歌山—和歌浦編(戦前)』和歌山市立博物館.

Buttimer, A. 1998. Geography's contested stories: Changing states-of-the-art. *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie* 89: 90-99.

Clout, H. 2005. Geographers in their ivory tower: Academic geography and popular geography in Paris 1931. *Geografiska*

Annaler 87B: 15-29.

Clout, H. 2008a. Popular geographies and scholarly geographies in provincial France: The Société Normande de Géographie, 1879-1937. *Journal of Historical Geography* 34: 24-47.

Clout, H. 2008b. Popular geographies in a French port city: The experience of the Le Havre Society of Commercial Geography, 1884-1948. *Scottish Geographical Journal* 124: 53-77.

Cragg, P. 1996. Popular geographies. *Environment and Planning D: Society and Space* 14: 631-633.

Johnston, R. 2009. Popular geographies and geographical imaginations: Contemporary English-language geographical magazines. *GeoJournal* 74: 347-362.

Lévi-Strauss, C. 1955. *Tristes tropiques*. Paris: Plon. レヴィ=ストロース, C. 著, 川田順造訳 1977. 『悲しき熱帯(上・下)』中央公論社.

Mallory, W. E. and Simpson-Housley, P. 1987. Preface. In *Geography and literature: A meeting of the disciplines*, ed. W. E. Mallory and P. Simpson-Housley, xi-xv. Syracuse: Syracuse University Press.

Olwig, K. R. 1981. Literature and 'reality': The transformation of the Jutland heath. In *Humanistic geography and literature: Essays on the experience of place*, ed. D. C. D. Pocock, 47-65. London: Croom Helm.

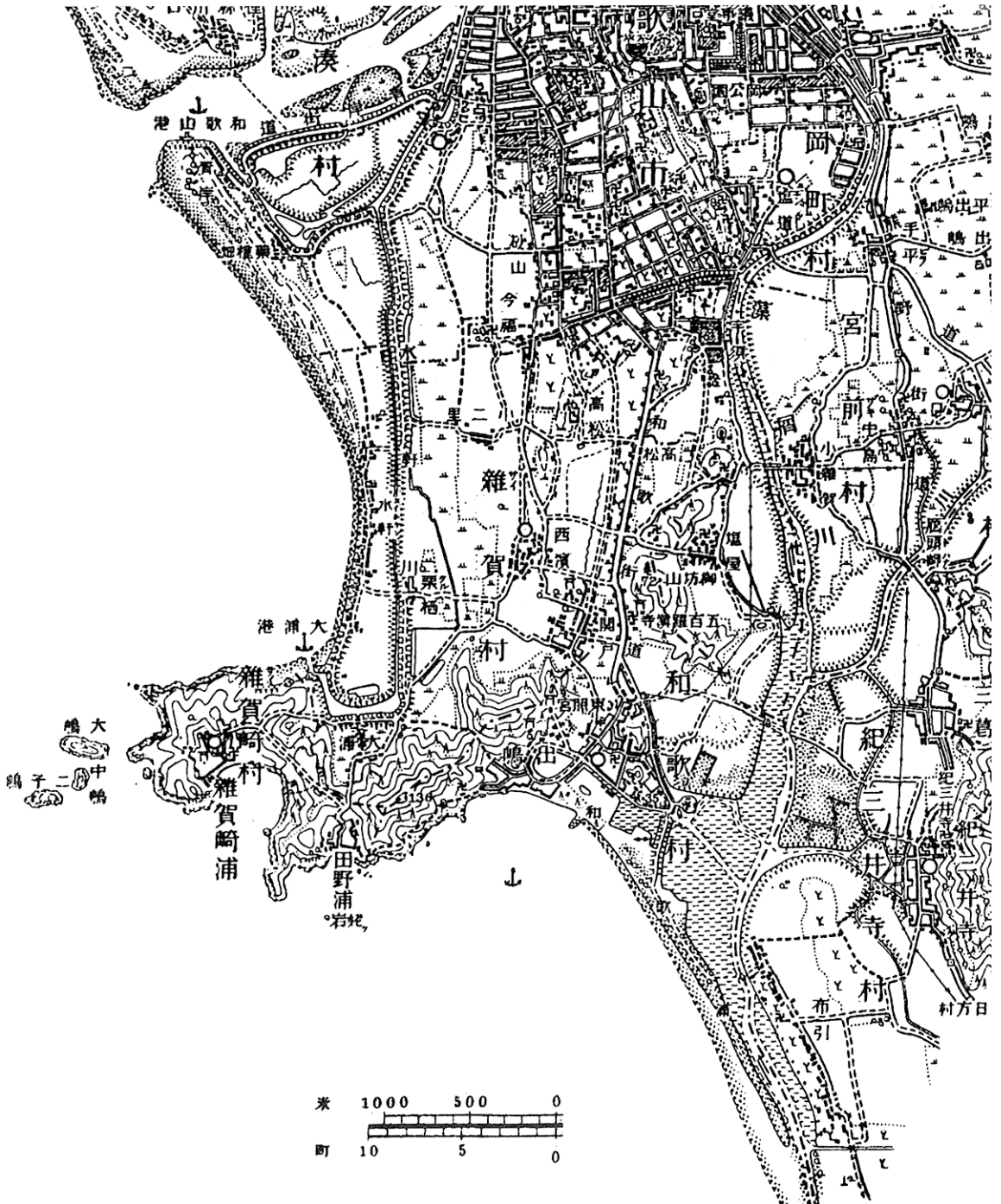
Philo, C. 1991. Introduction, acknowledgements and brief thoughts on older words and older worlds. In *New words, new worlds: Reconceptualising social and cultural geography. Proceedings of a conference organised by the 'Social and Cultural Geography Study Group' of the Institute of British Geographers, Department of Geography, University of Edinburgh, 10-12 September, 1991*, ed. C. Philo, 1-13. Aberystwyth: Cambrian Printers.

Pocock, D. C. D. 1981. Introduction: Imaginative literature and the geographer. In *Humanistic geography and literature: Essays on the experience of place*, ed. D. C. D. Pocock, 9-19. London: Croom Helm.

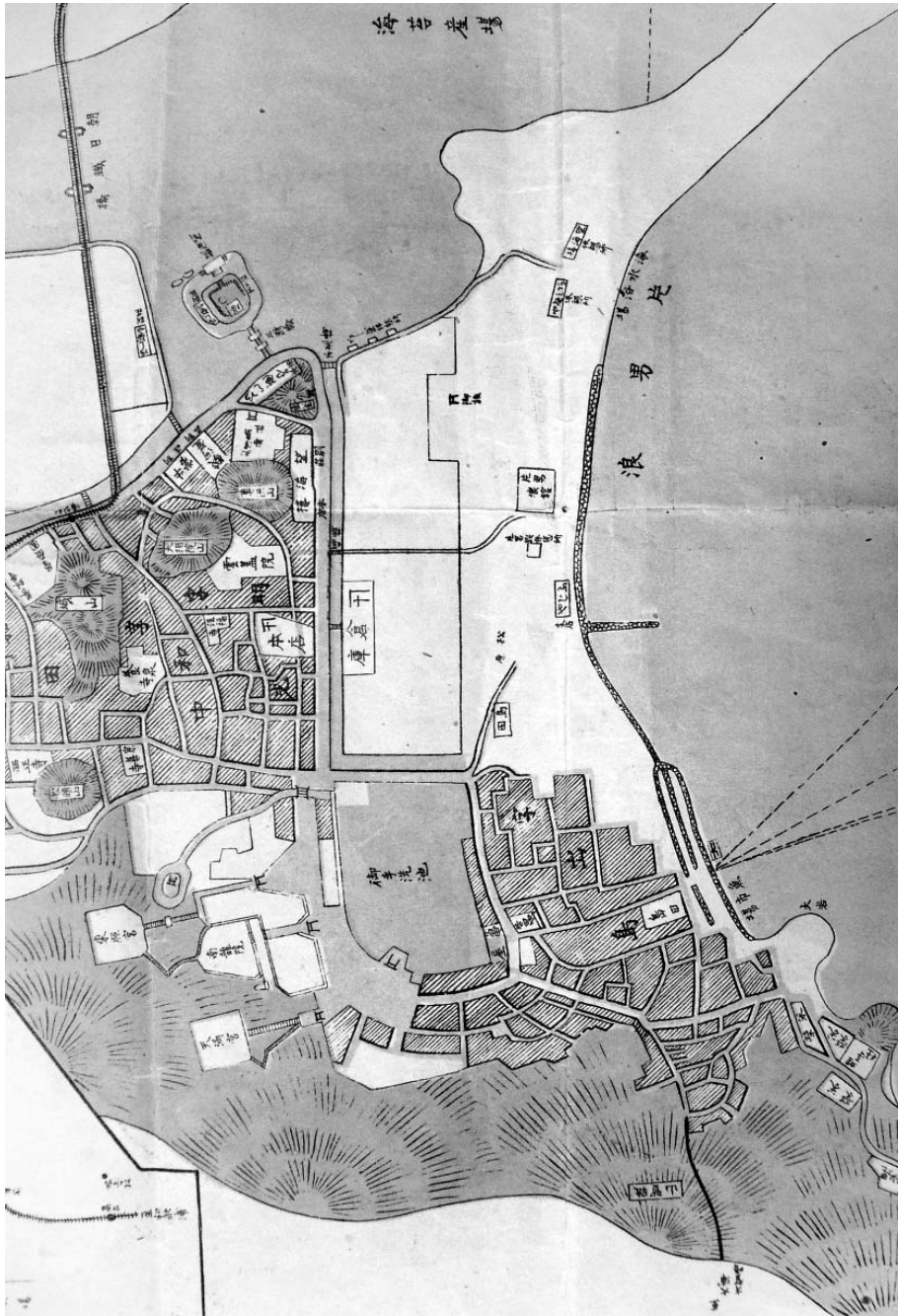
Pred, A. 1990. *Lost words and lost worlds: Modernity and the language of everyday life in late nineteenth-century Stockholm*. Cambridge: Cambridge University Press.

付記

本稿の素材の一部は、和歌山大学教育学部の2010年度前期授業「地域環境論演習A」の教材として使用した。ゼミ生の皆さんとのディスカッションは、本稿をまとめるに当たって大いに参考にさせていただいた。田山花袋記念文学館の福田美枝氏には、資料収集や地図閲覧に関して便宜を図っていただいた。和歌山市立博物館の太田宏一氏には第2図の画像データを提供いただき、和歌山県立向陽高等学校の梶川哲司氏には『紀伊毎日新聞』の画像データを提供いただいた。記してお礼申し上げます。



第1図 陸地測量部五万分一地形図「和歌山市」(部分)
 (1898 (明治 31) 年縮成修正測量・発行)
 (原図を 130% に拡大)



第2区 紀伊和歌浦明細新地図 (部分)
[1909 (明治42) 年11月出版]
(和歌山市立博物館 (2011: 13) 所収の画像データを使用)